

R-18

泉と猫犬



a bullet.

純反良幸
伊祖子久美



梟ふくろうと 猫りょうけん犬

原作
作画
・
伊純
祖友
子良
久幸
美



この本は「成人向け」です。
購入者が18歳以上であるという申告の元に頒布しております。
よって18歳未満の購入、閲覧を禁止します。

内容はすべてフィクションであり、実在のいかなる人物、団体とも
関係ありません。





S 駅西口にて
逃走中の被疑者確保
繰り返す
被疑者確保

—
あ

猫犬



泉...

鐘淵イッ

警視庁

泉と



申し訳ない！

強盗事件の容疑者が
あなたに似た体格と
服装で……



遅いよ
何やってんの

俺に言うな！
警察のせいだ

スタジオから
ココまでに
何回職質されたと
思う？
四回だぞ、四回！



弁償します！



え…！？

そうしてもらえば？
ヴィンテージもので
七万もしたんだし



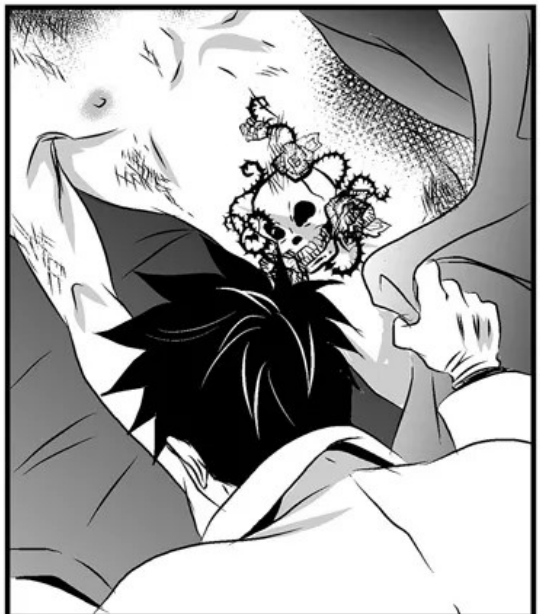
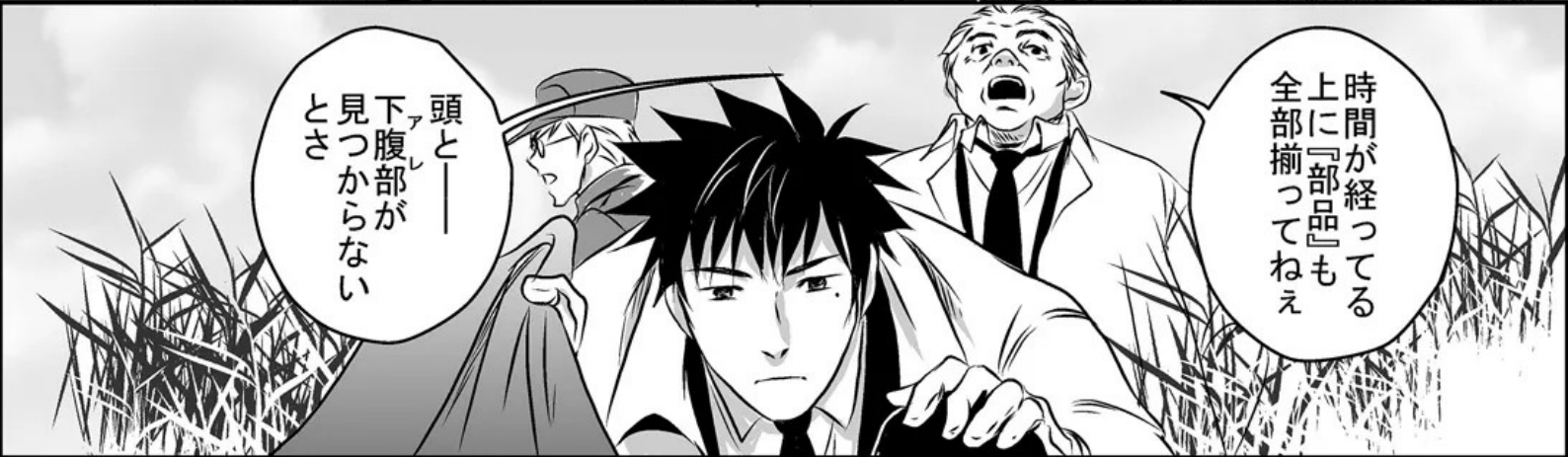
あーあ……
着替えに戻る？
その格好じゃ更に
不審者だし

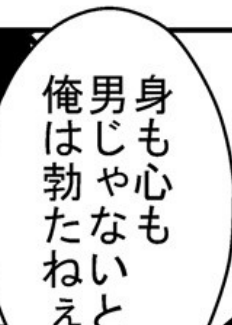
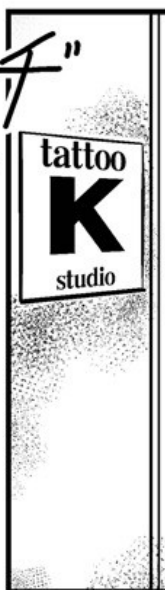
めんどくせえ
そこ
コンビニで買う















迅速な
身元確認のため
御協力を
お願いします

変死体が
発見されました



容疑者ではなく
被害者の身体にあった
タトゥーについて
お尋ねしたいんです



殺されたのか？



犯人以外の
誰の不利益にも
なりません
心当たりがあれば
是非教えて
欲しいんです



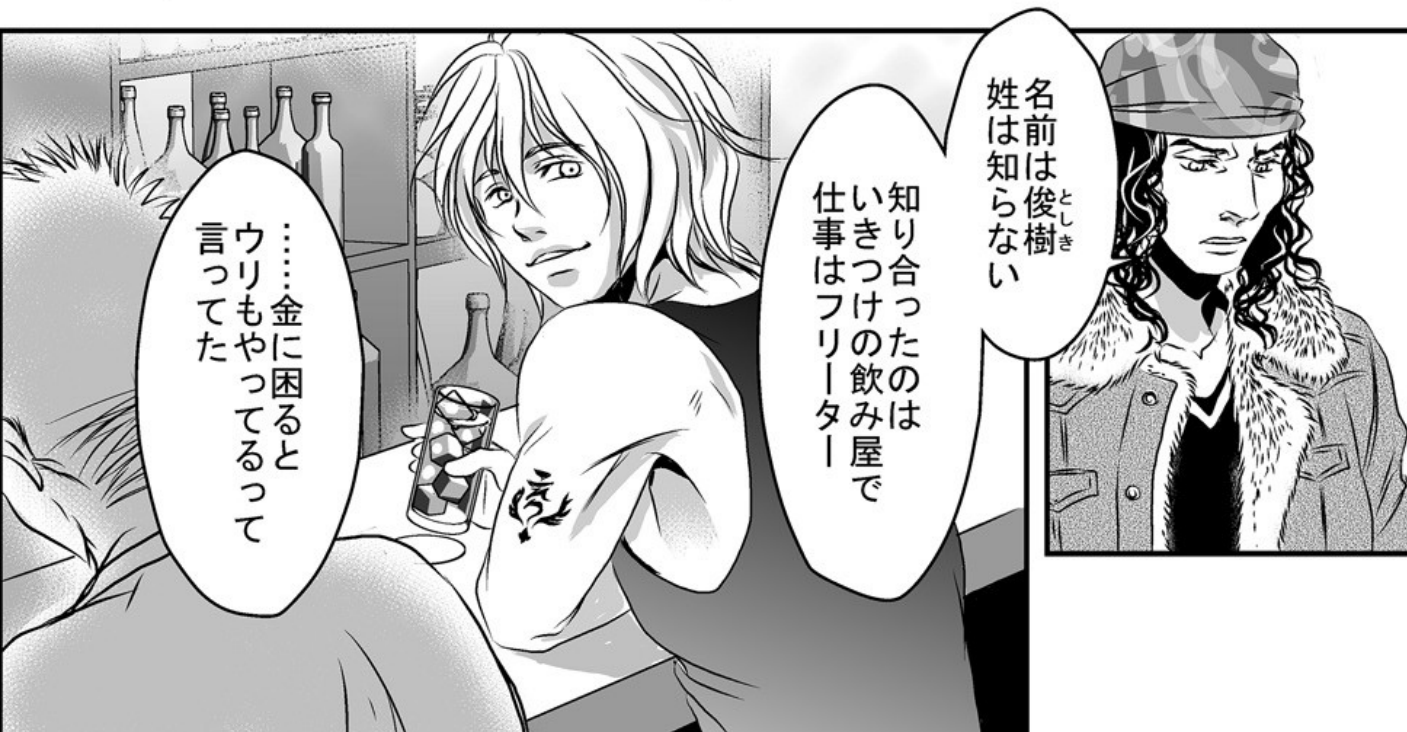
本来なら警察とは
仲良くしたく
ないんだがな

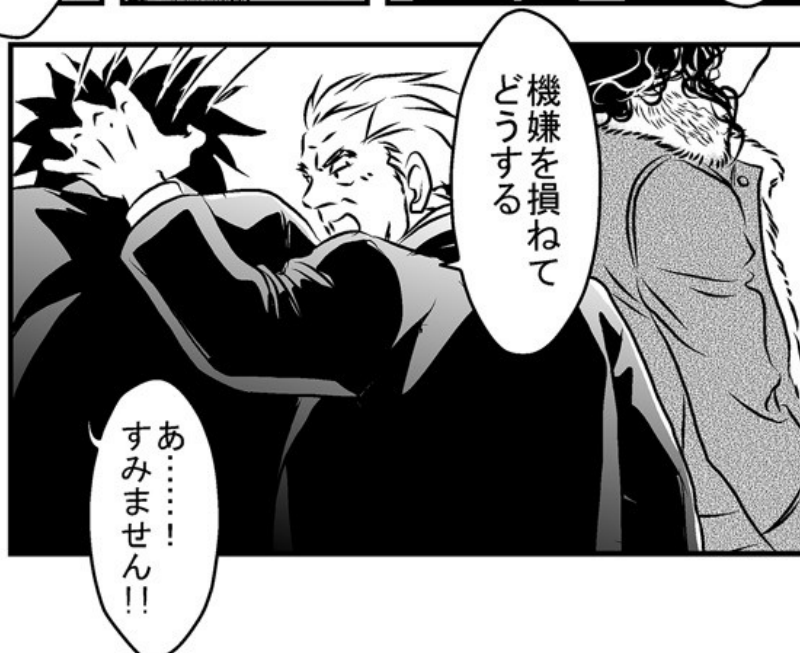
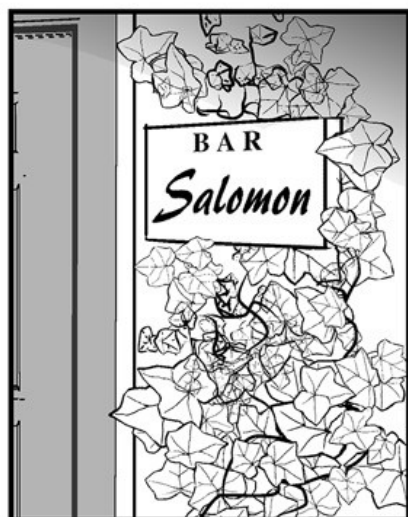


解剖の詳細は
結果はまだですが
恐らく……
体内から微量の
薬物反応も
ありましたので
そちらの関係も
調べています













待ってください
鐘ぶ……

お前、今の男に
しっかり
捕まえて貰え

万が一
あいつと別れても
恨みを買うような
遊び方はするな

他人のこと
言えない
遊び人の癖に――

クス

解った解った

俺は
知ってる限りの
情報は出したぞ

……あなたもゲイ
なんですよ？

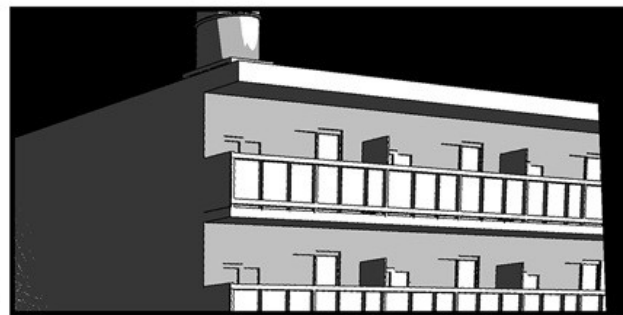
あんたに何の
関係がある

被害者とも
性的な関係に
ありましたか？

今の人も？

俊樹とはない

――俺は
容疑者か？





俺で
勃つんだらうか？

間違はなく
身も心も男だけど



『ゲイだったのは
犯罪者も同然か？』

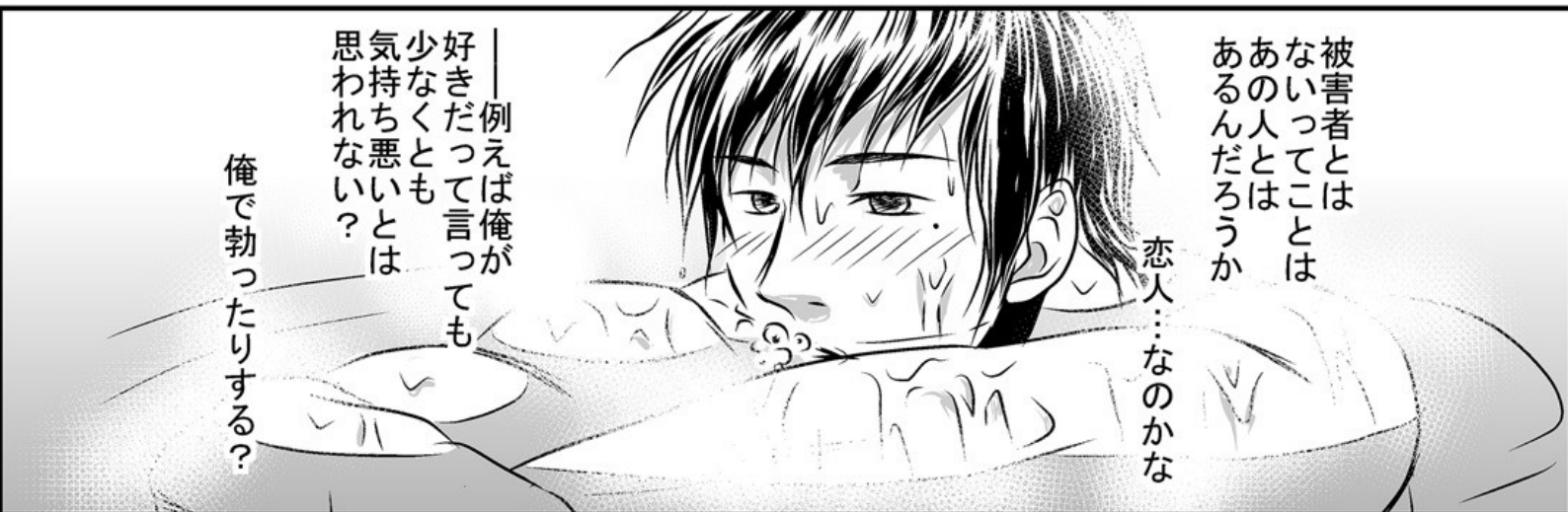


ゲイ——なのか



『遊び人の癖に』

遊び人……なら
いっそ遊ばれたい



被害者とは
ないってことは
あの人は
あるんだらうか

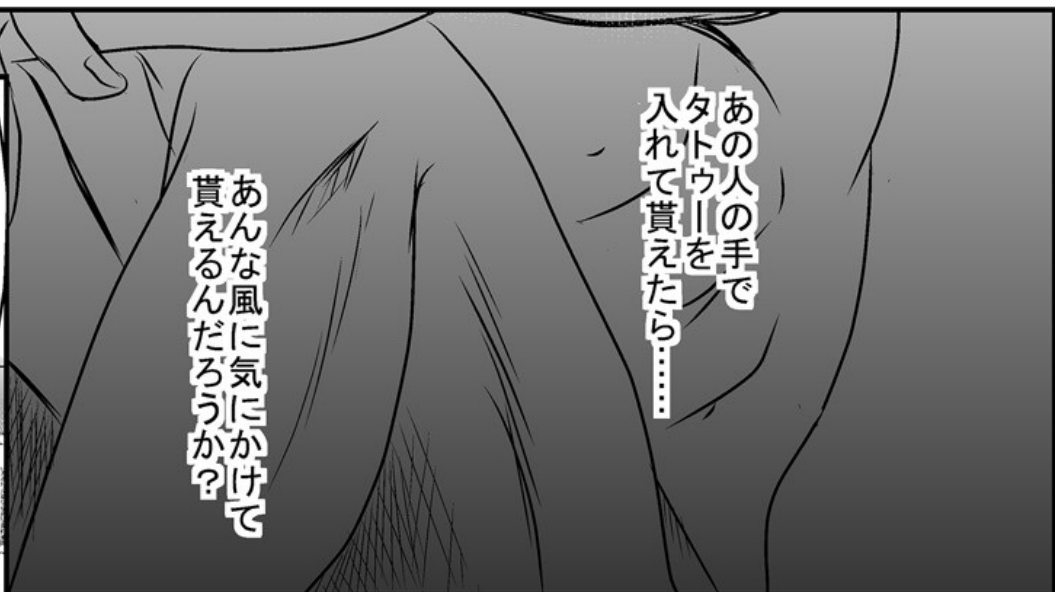
恋人……なのかな

——例えば俺が
好きだって言っても
少なくとも
気持ち悪いとは思
われなない？

俺で勃ったりする？

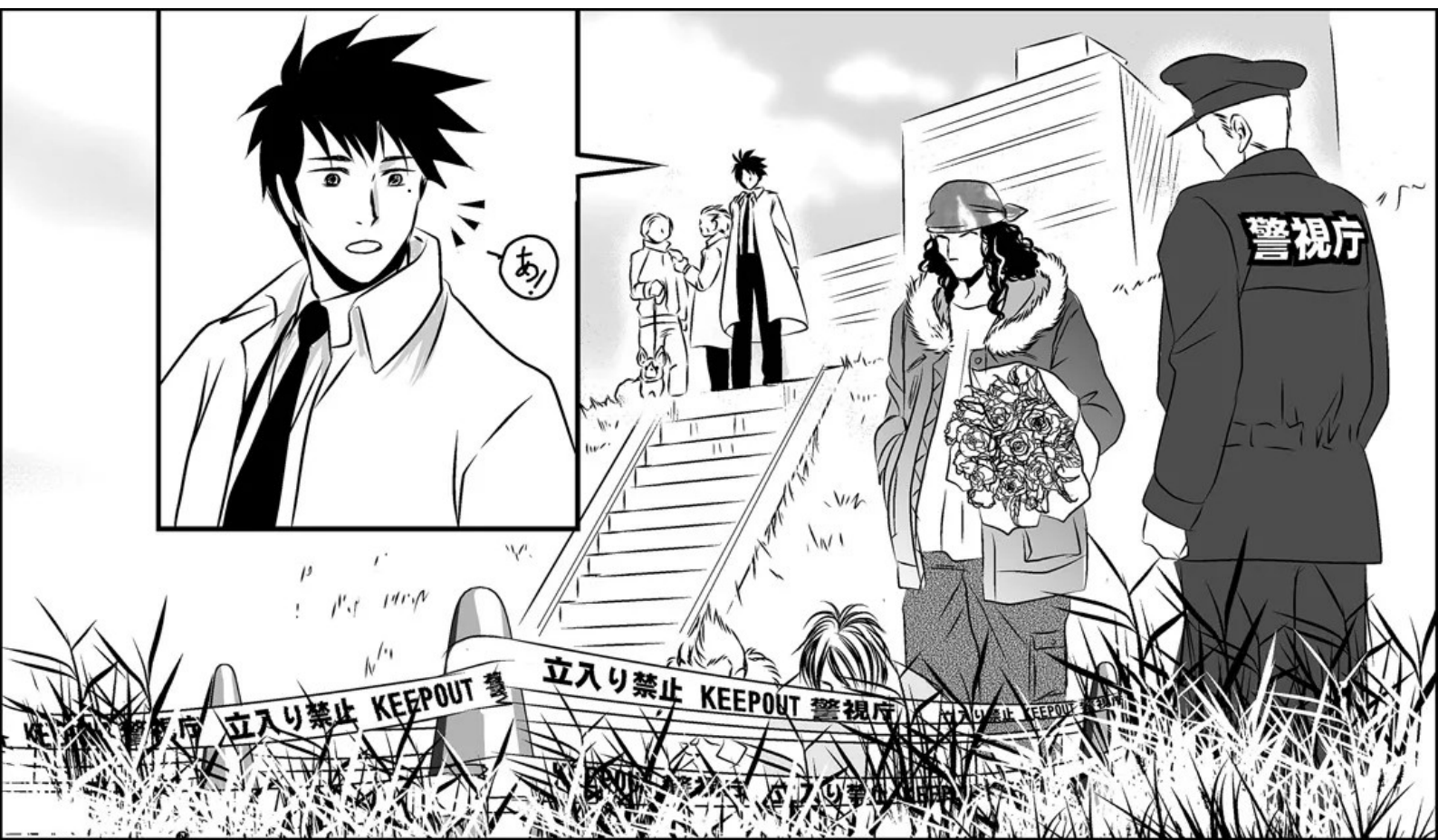


来栖
いい加減にしないと
のぼせるぞー

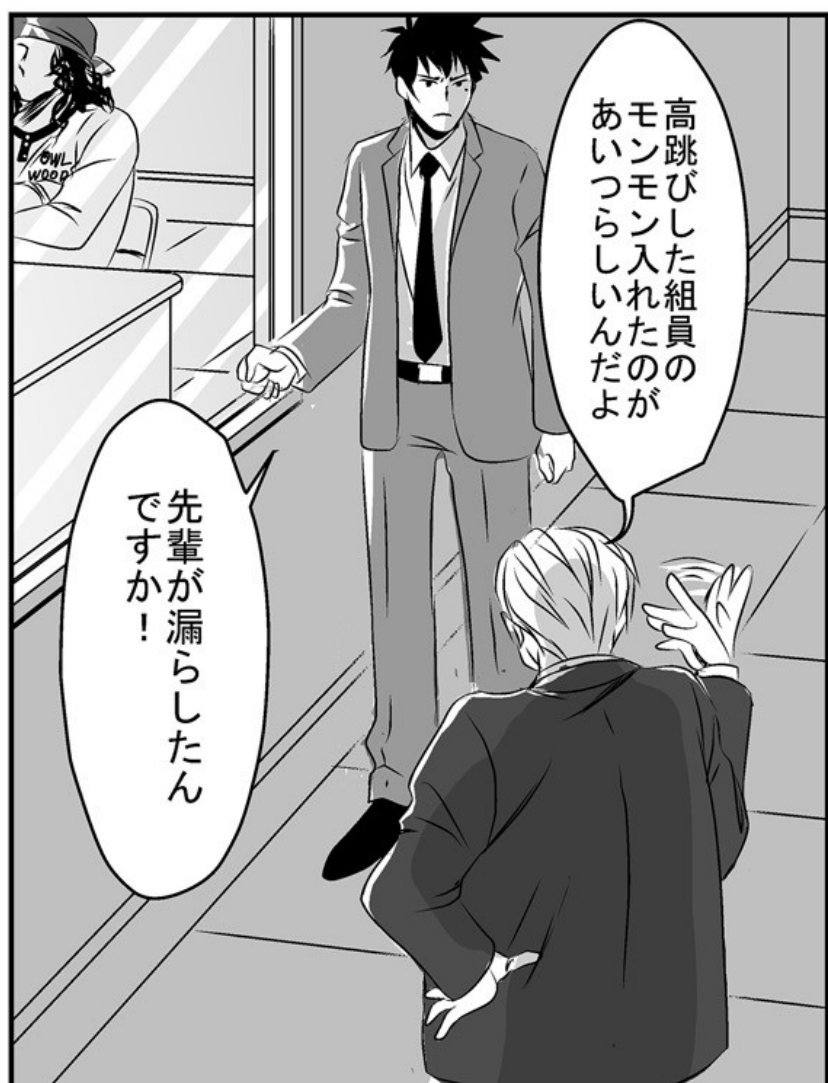


あの人の手で
タトウーを
入れて貰えたら……

あんな風に気にかけて
貰えるんだらうか？







見損ないました！
善意の協力者を
売るなんて！

おい、お前は
どっち側の
人間だ？

秘密にすると
約束した
自分の面子は
どうしてくれるん
ですか！

あれが
素人な訳がねえ

おまえ
自分が彫った
刺青はどんな
小さいのだろうと
覚えてるそうだな？

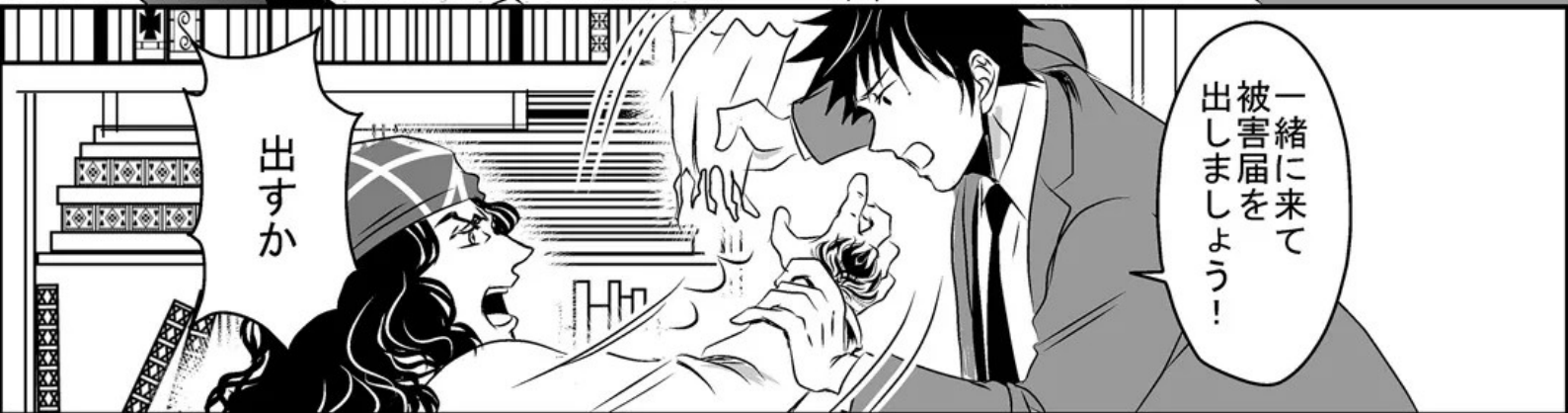
さあ？
そんなこと誰が
言っただんだ？

おまえ自身も
叩けば埃が
出るんじゃないか？
え？
宗教美術の博士様？

ロシアだの東欧だのに
しょっちゅう
渡航してるのは
本当に研究の
ためか？

叩いて何か
出してみろよ
出せるもんならな







おたくの他には
この大男^{デカブツ}だけだと



指紋は――



脅迫してきたのが
殺人事件の方の犯人なら
組織犯罪^{ソウタキ}対策部^{サイサイ}ではなく
自分の管轄^{カンカツ}です！

犯人の指紋が
ついているかも



あんたの
交遊^{カウ}関係だと
容疑者^{ヨウギシャ}が多過ぎて
絞り切れないよ



こりゃヤクザの
脅し方じゃないね



これ以上警察に
出入りされるのは
迷惑だ



必要ない

まあ、地域課にも
連絡して
警戒はさせて
貰いますけどね

鑑査庁







宗教美術の研究者でもあるのに

どうしてタトゥーアーティストに？

俺にとっては
そうかけ離れた
分野じゃないんだがな

中世の聖像
尊征M鑑

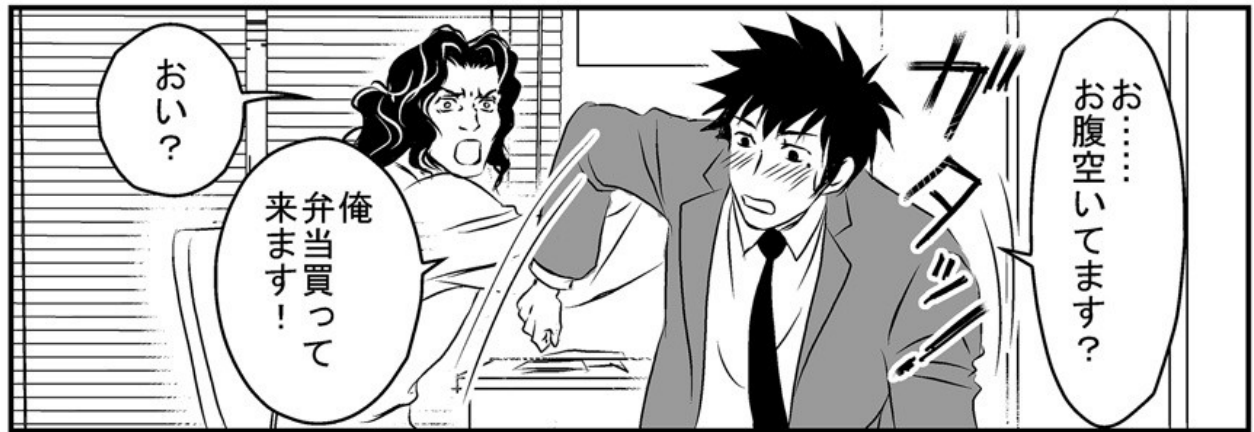
——そう
なんですか？

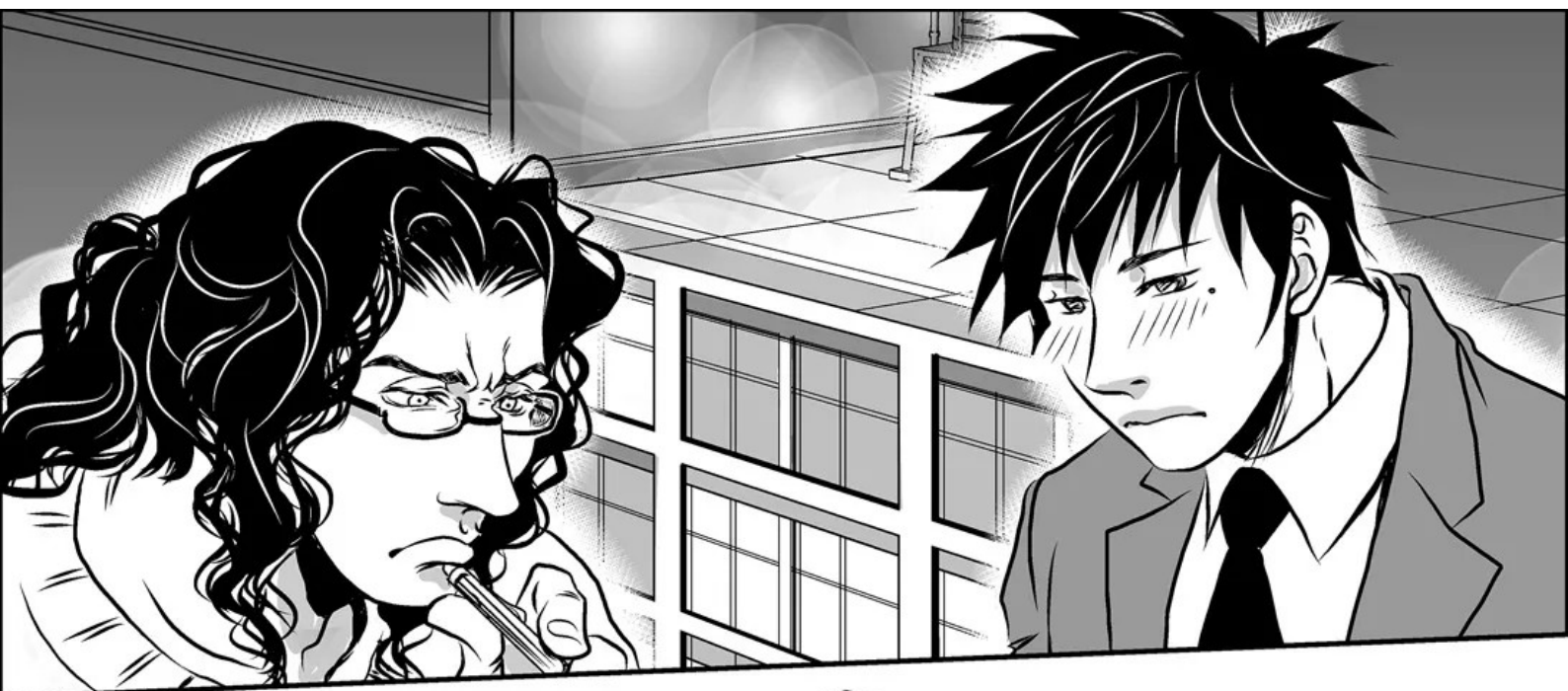
憧憬や願望や思想を
常に身近に置いて
賞翫するって意味では
——寧ろ近いんだ

そんな風に見るな
仕事にならない

まあ、一番は
学者じゃ
食えなかった
からなんだが

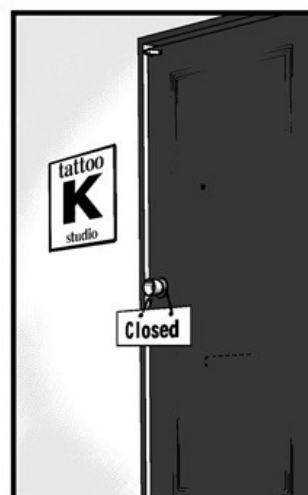
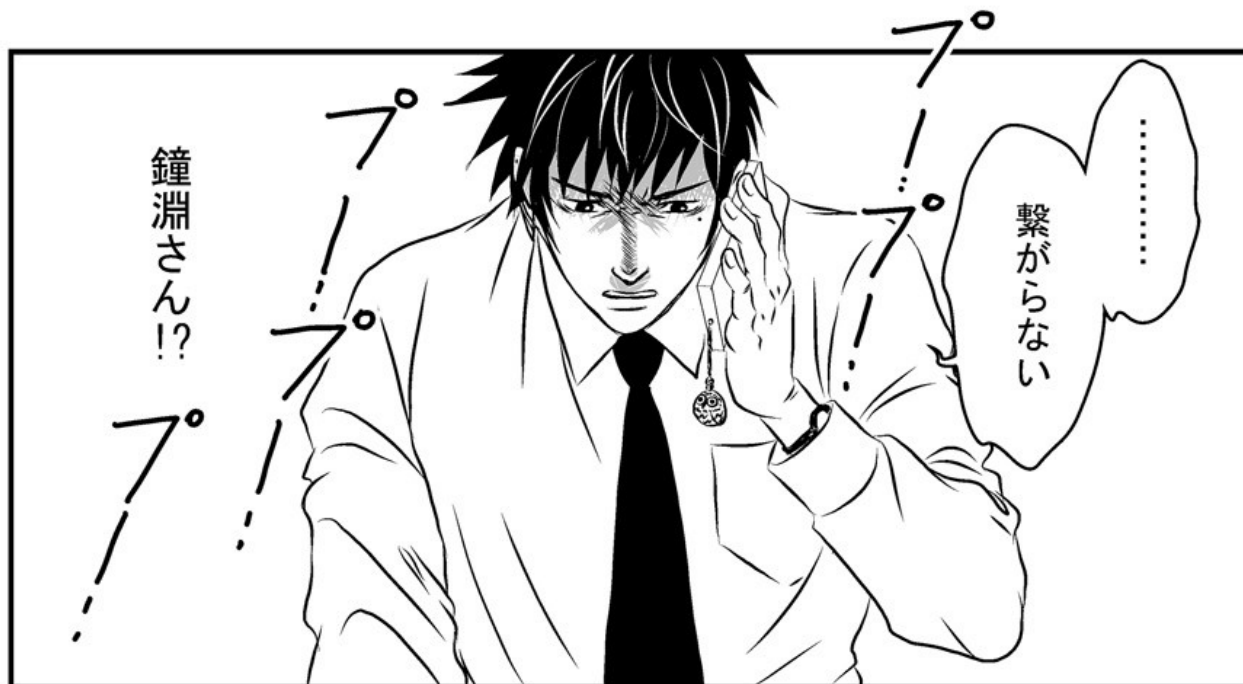
中世の聖像





来栖！









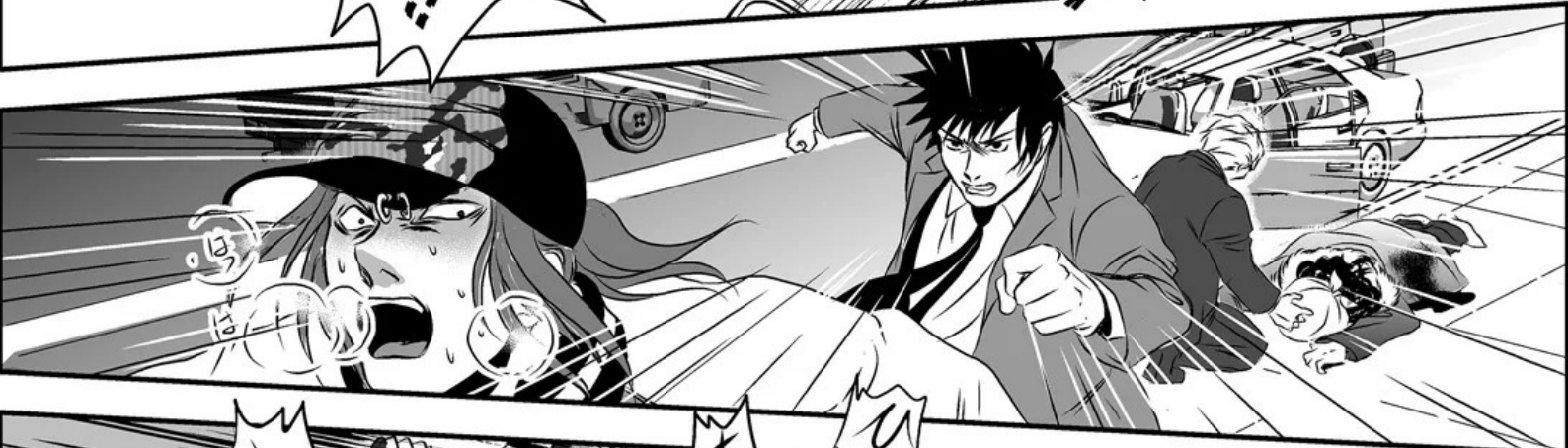
あ……!!



おい!
あれ鐘淵じゃないか?

え?









俺が傍に
いながら……



……容疑者の
自宅冷蔵庫から
被害者の頭部を含む
遺体の一部が
発見されました



犯行動機は
同性間の痴情の
纏れと見られて
おり……



俺は――

あなたに迷惑を
かけるばかりで

その上あなたを
守ることも
出来ず……

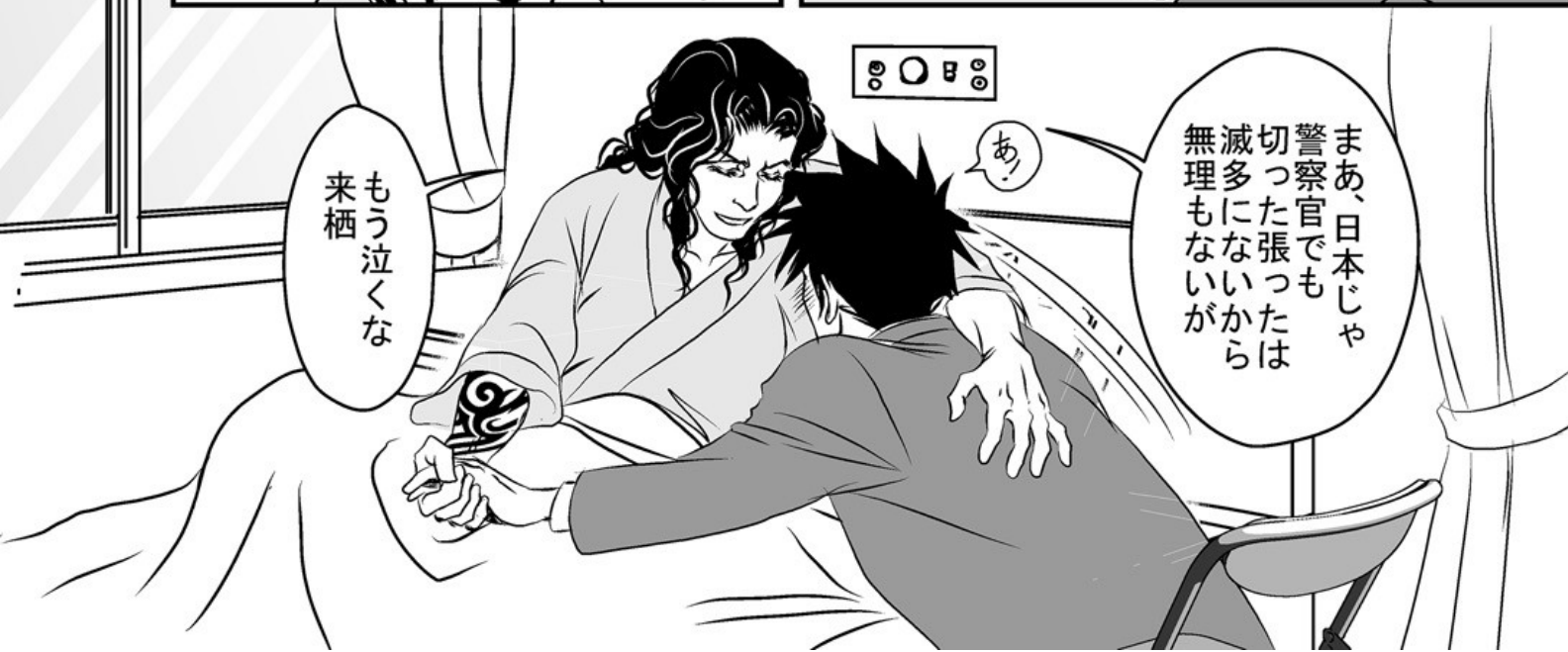


フッ

現場じゃ
大活躍だったのに



おい泣くなよ
明後日には
退院する予定だし



まあ、日本じゃ
警察官でも
切った張ったは
滅多にないから
無理もないが

あ

もう泣くな
来栖





あんまり警察と
仲良くすると
商売に差し支える
んだがな



ああ……



余計な散財
させやがっ
………？



あ……その

……身体は
もう大丈夫かと
思っ



………
人々の商売道具
根こそぎさらって
行きやがって

返却待ってたら
こちとら日干しに
なっちまわあ



俺、あなたを
疑ったことは
一度もないんです



今日は仕事で
来たんじゃ
ないんだろ？



被害者や
あなたの友人に

嫉妬……
してしまった
だけで

……ただ



そうです！

……ノンケだろ
お前



俺は
警察官である限り
あなたにタトゥー
入れて貰う訳には
いかないし



あんな風に心配して
貰うことも
一生ないだろうし
死んだって
あんなには……



……たぶん



『たぶん』
って……



今までこんな風に
男なんか好きに
なったことないし

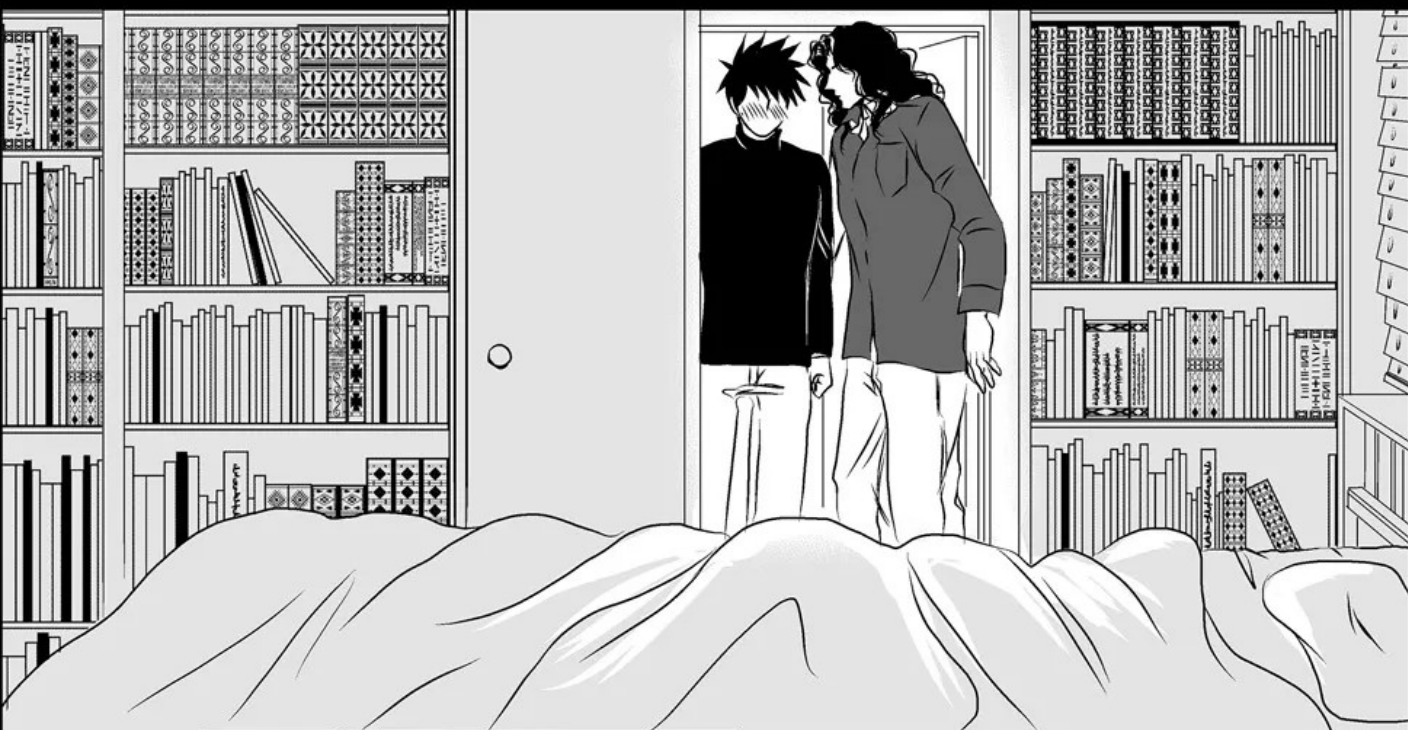
ついこないだまで
あなたも普通に
女が好きなんだと
思ってた
死ぬほど悩んで
たんだ！

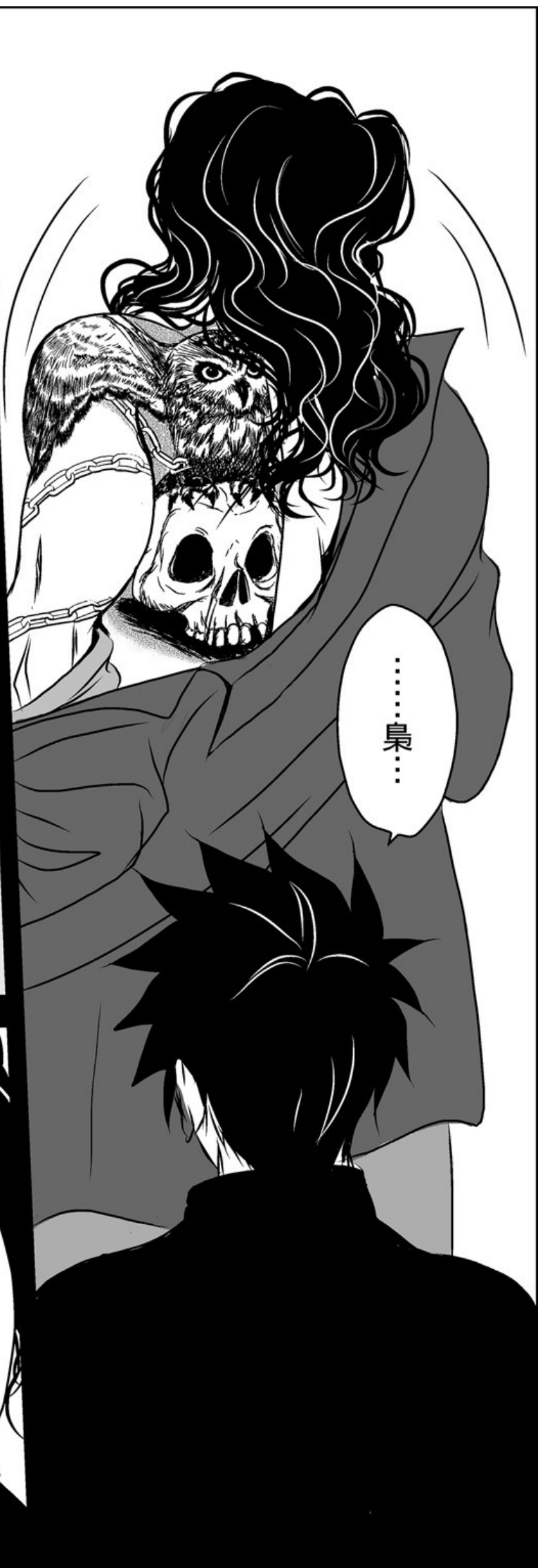
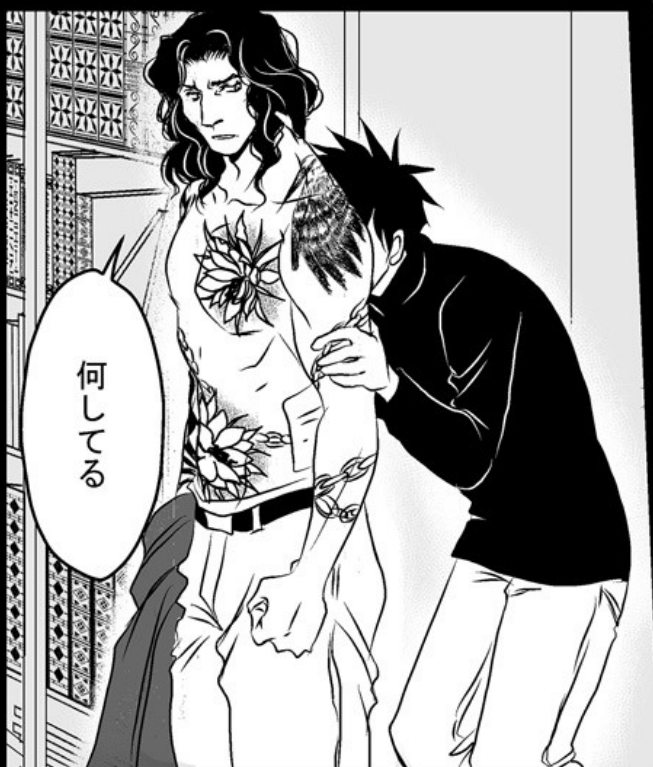


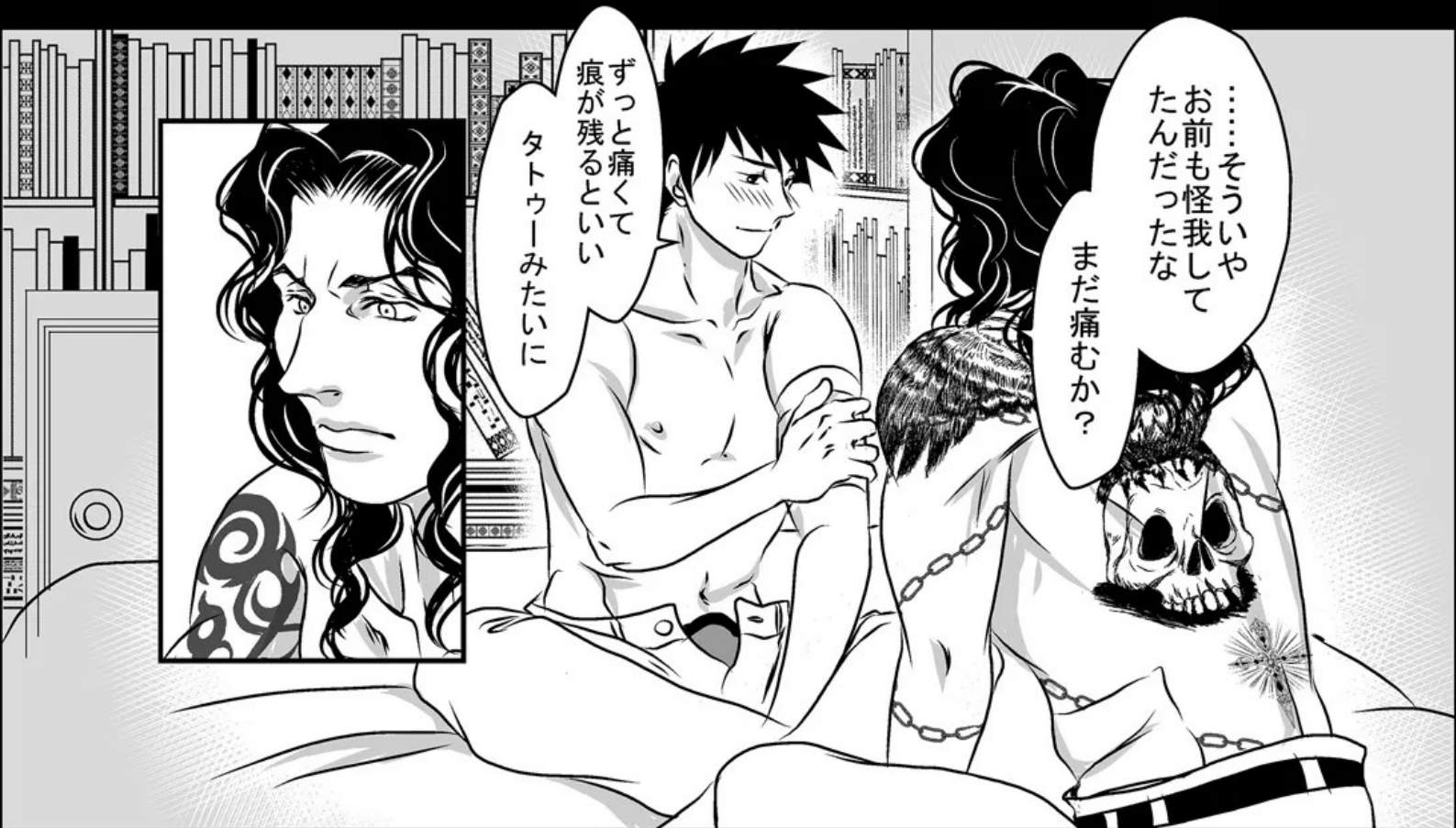
気の迷いなら
今すぐ取り消せ
さもないとこのまま
喰っちまうぞ

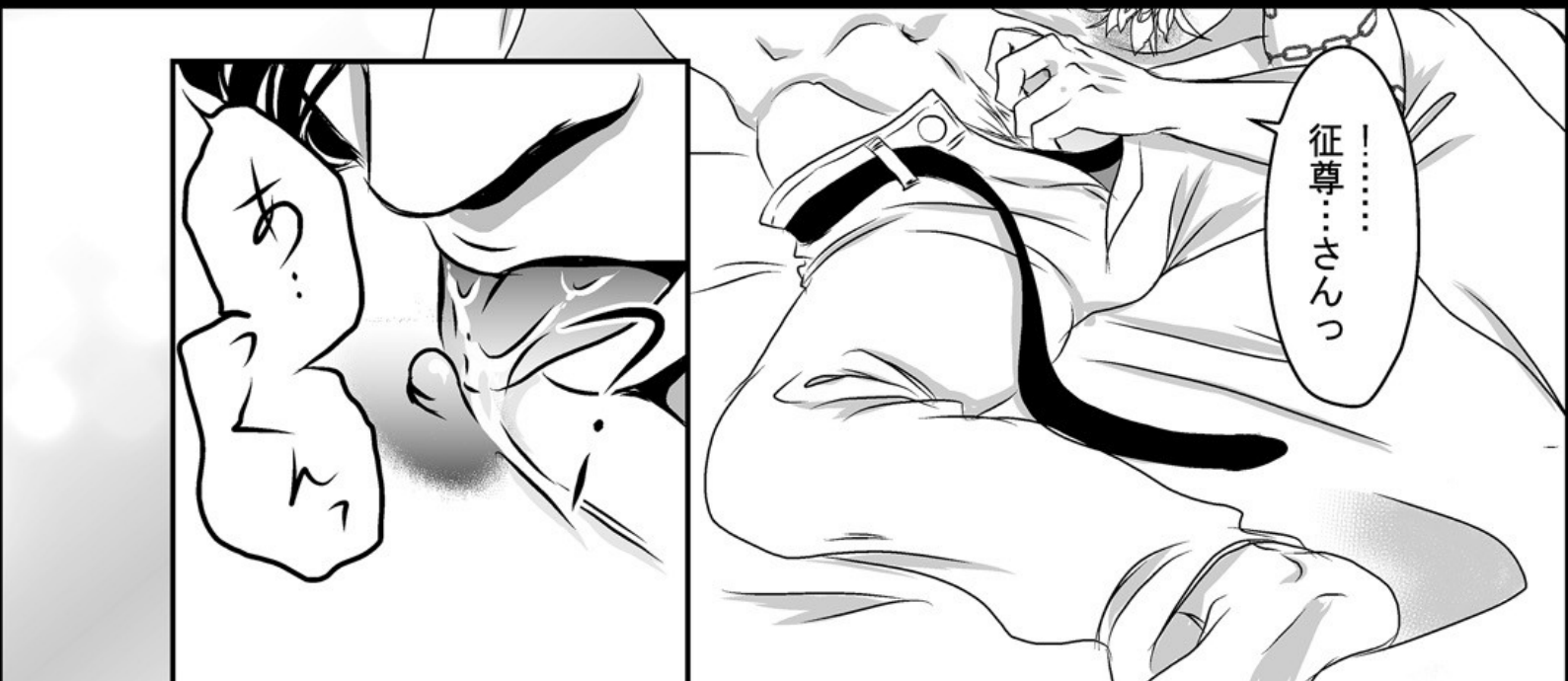
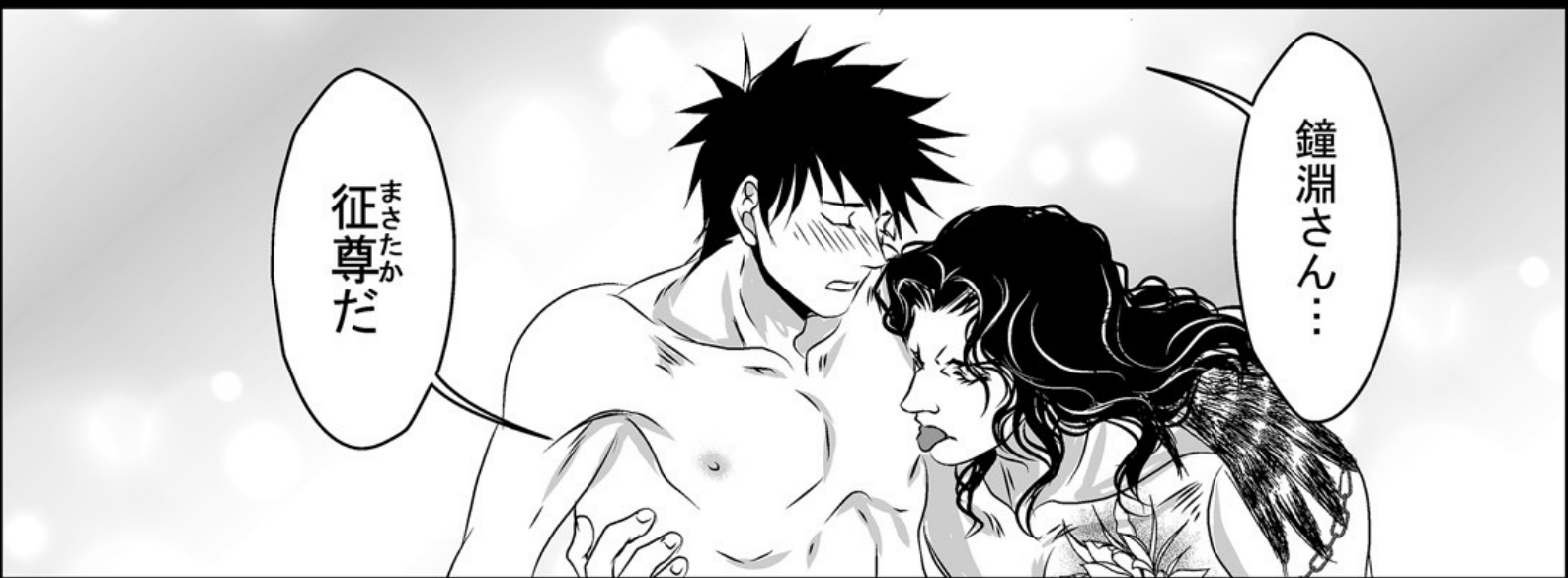
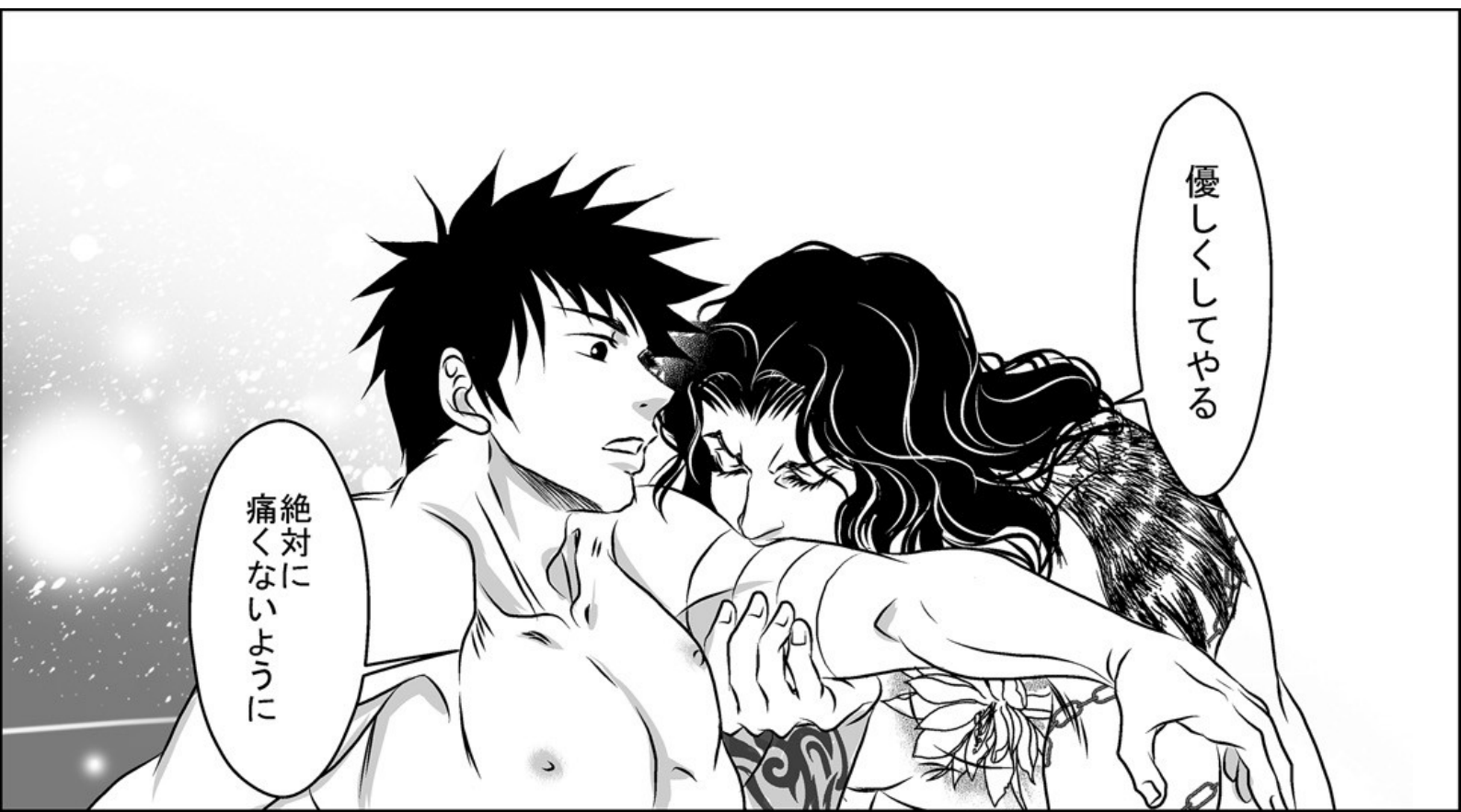
気の迷い
なんかじゃない！

本当に……
灼け付くかと
思うほど
嫉妬したんです



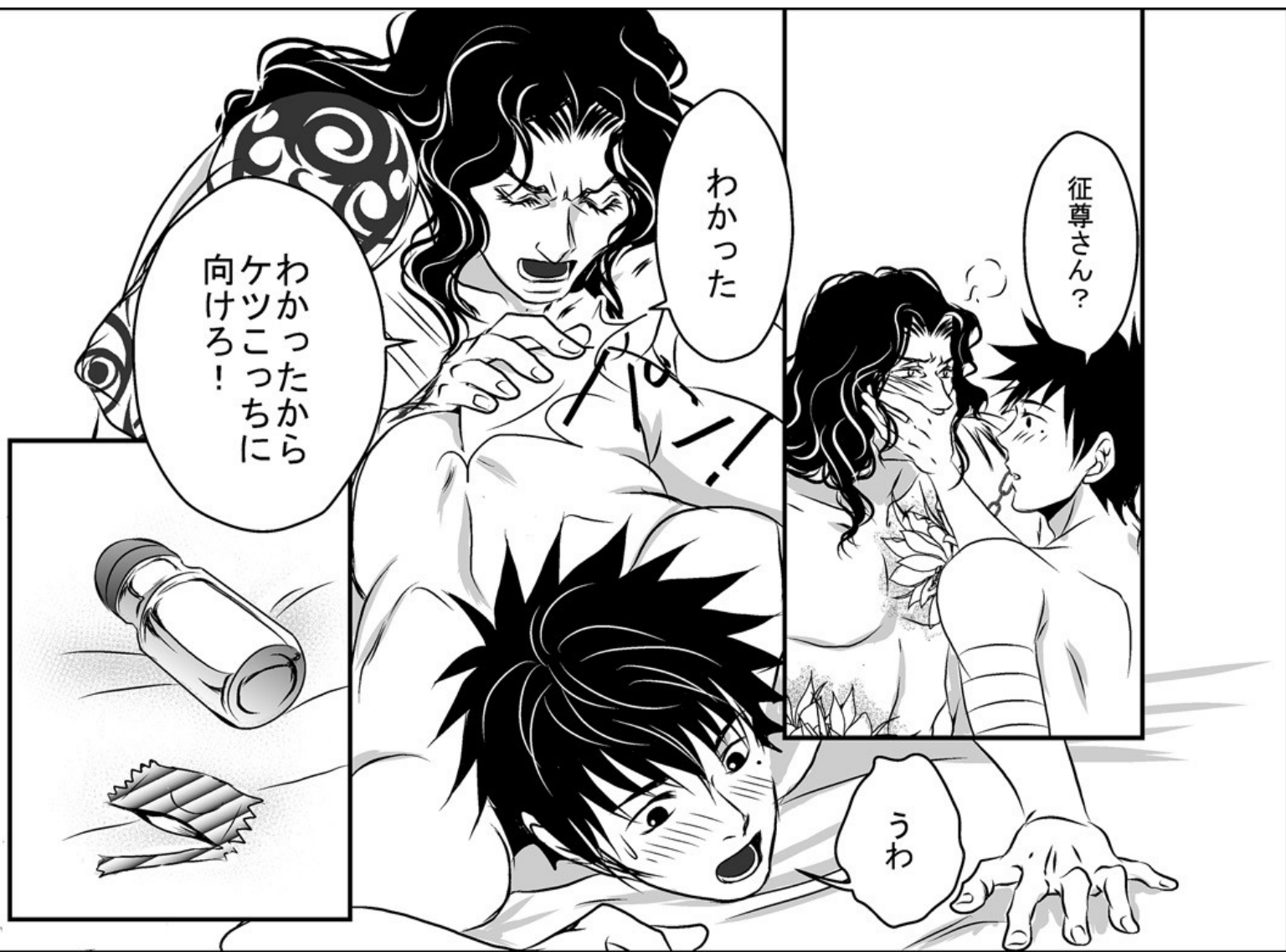


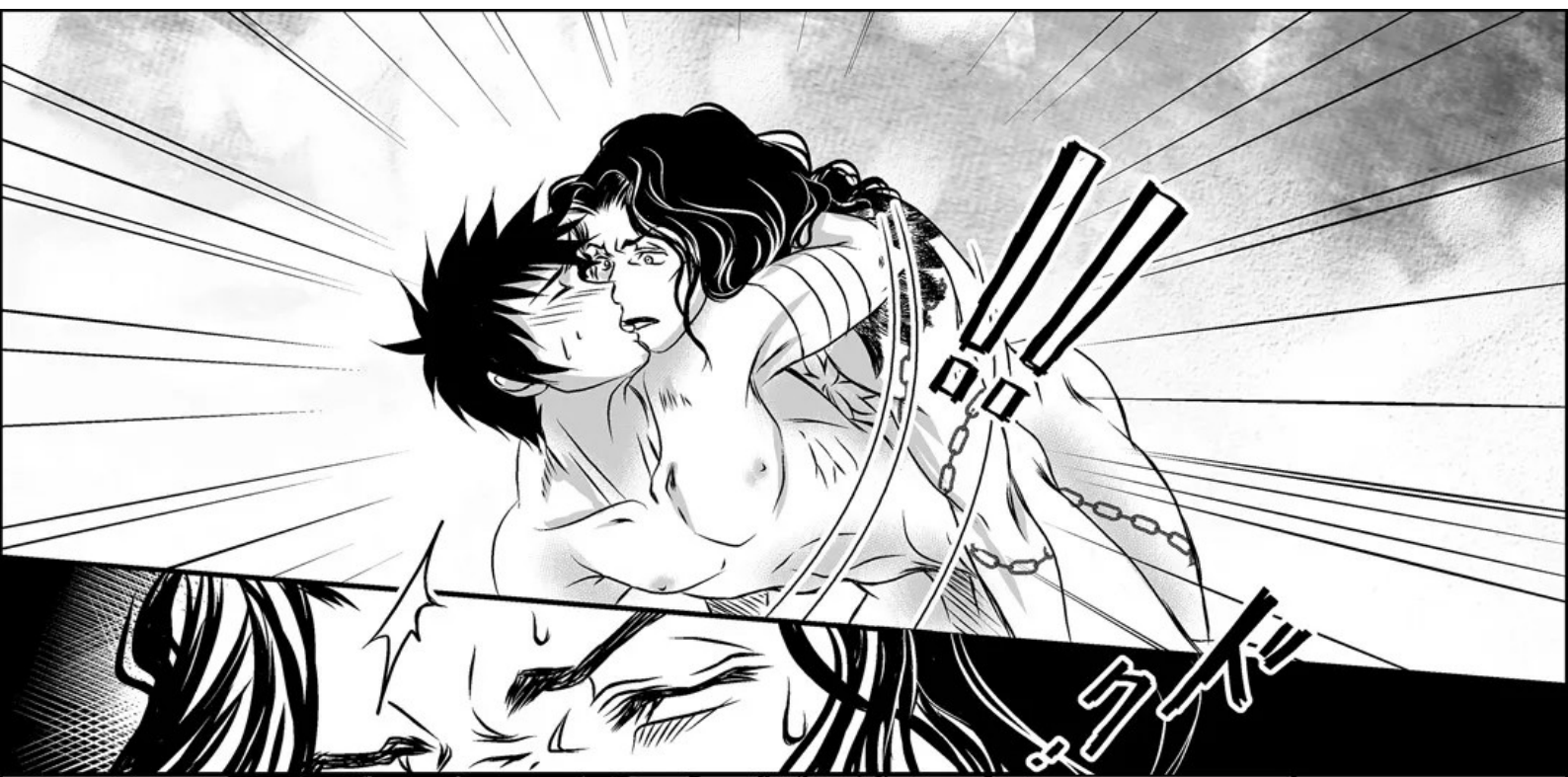






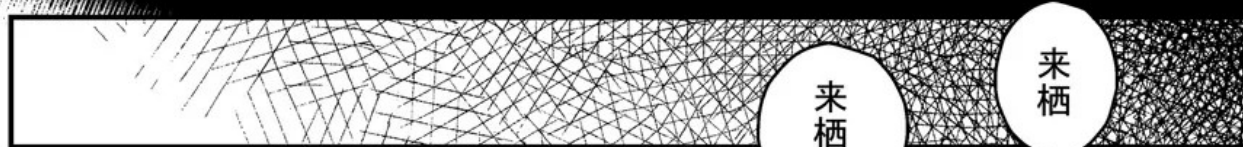






お前それは
反則って
モンだろう

……来栖



来栖

来栖？



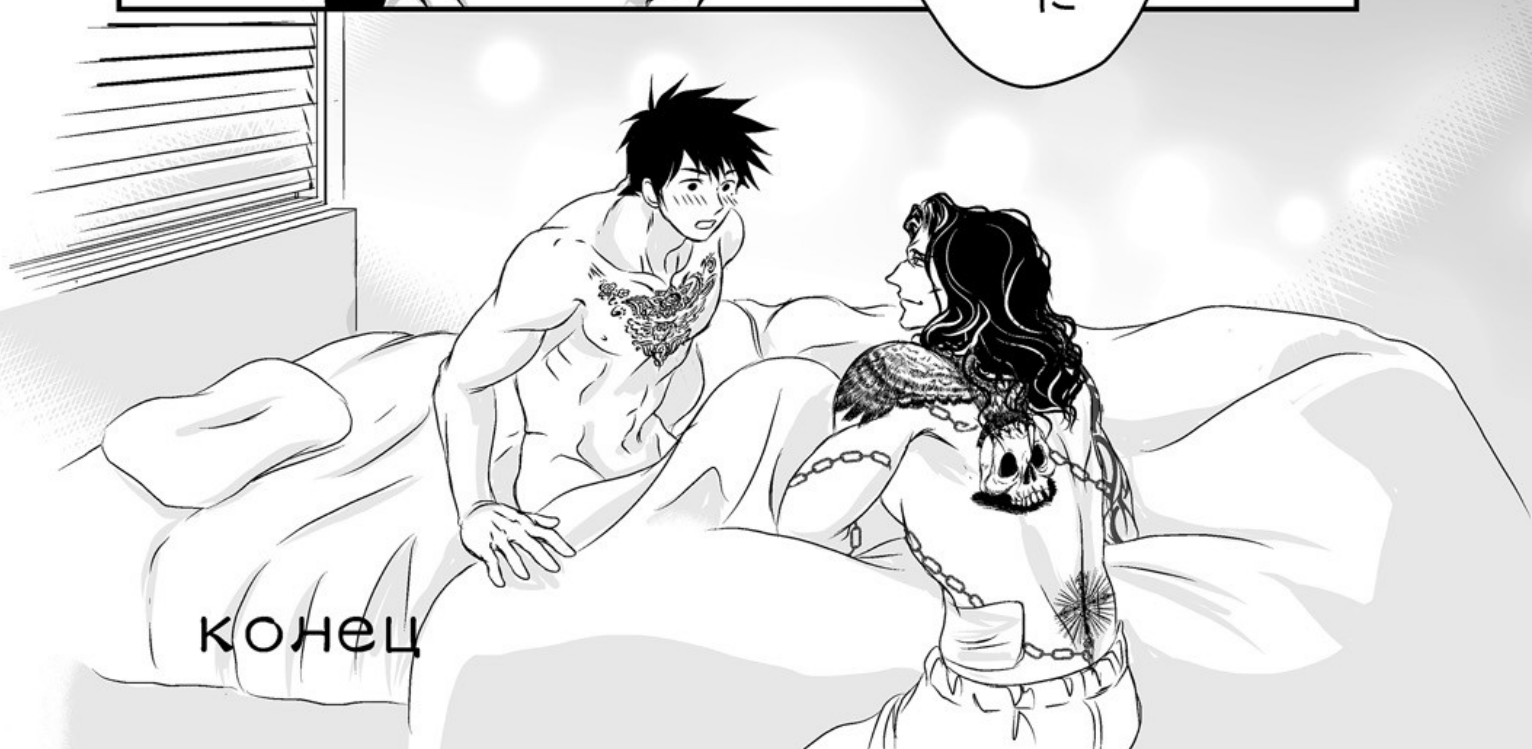
なんか
くすぐったい？

ん……



……ホント
反則だ

すやー……



「ПОСТСКРИПТУМ」

伊祖子久美

「征尊さん」

恋人が俺を呼ぶ声が聞こえる。

ブラインドの隙間から外の光が斑に差し込んでいる。普通の勤め人は満員電車の中で窒息しそうになる時間だろうが、俺にとってはまだ真夜中だ。

俺の恋人は俺のベッドを出てスーツを着込み、ネクタイを締めていた。

小憎らしい。

前の夜にどれだけ時間をかけて焦らしても、もう許してくれと懇願するまで泣かせても、朝になれば整然と身支度をして、厳格な公僕に戻りやがる。

「おはようございます」

俺を起こしたのは、この前、泊まったとき「よく眠ってたから」という理由で物音も立てずに出て行きやがったことに文句を言ったからだだろう。

それなのに申し訳なさそうに俺を見る。

「おう……」

寝起きの俺の声は掠れて、殆ど呻き声に近かった。

「行ってきます」

そう言ってドアの方に向かうとするので呼び止めた。

「来栖」

こいつは。

出掛ける前に起こせと言ったらその通りにするがその後が悪い。……なんのために起こせと言ったのか考える。

「キスくらいしてけ」

そう言うのと、顔を真っ赤にしてベッドの脇に戻って来て屈んで俺の額にキスした。

頬と、ついでに耳朶にもお返しをしてやるともって赤くなった。

「征尊さん？」

「ん？」

「俺には名前で呼べって言っておいて、どうして征尊さんはまだ俺を名字で呼ぶんですか？」

ああ、まだ言っていなかったか。

「俺の腰の真ん中」

「え？」

「十字架のタトゥーがあるだろ」

「ええ」

「ロシア語では КРЕСТ。英語で CROSS。日本ではキリスト教が伝わったときにポルトガル語の CRUZ が訛って

クルスになった。」

だから、俺はどれだけ馴染んでも、ずっとこいつを

来栖と呼ぼうと思う。

来栖は俺の唇にキスした後、俺を見つめ、俺の髪を指に巻いて、またキスした。時折、ためいきまじりに俺の名を呼びながら、何度も。

ああ、くそ、仕事なんか行かせたくねえ。

しかし、来栖は、最後に名残惜しげにもう一度キス

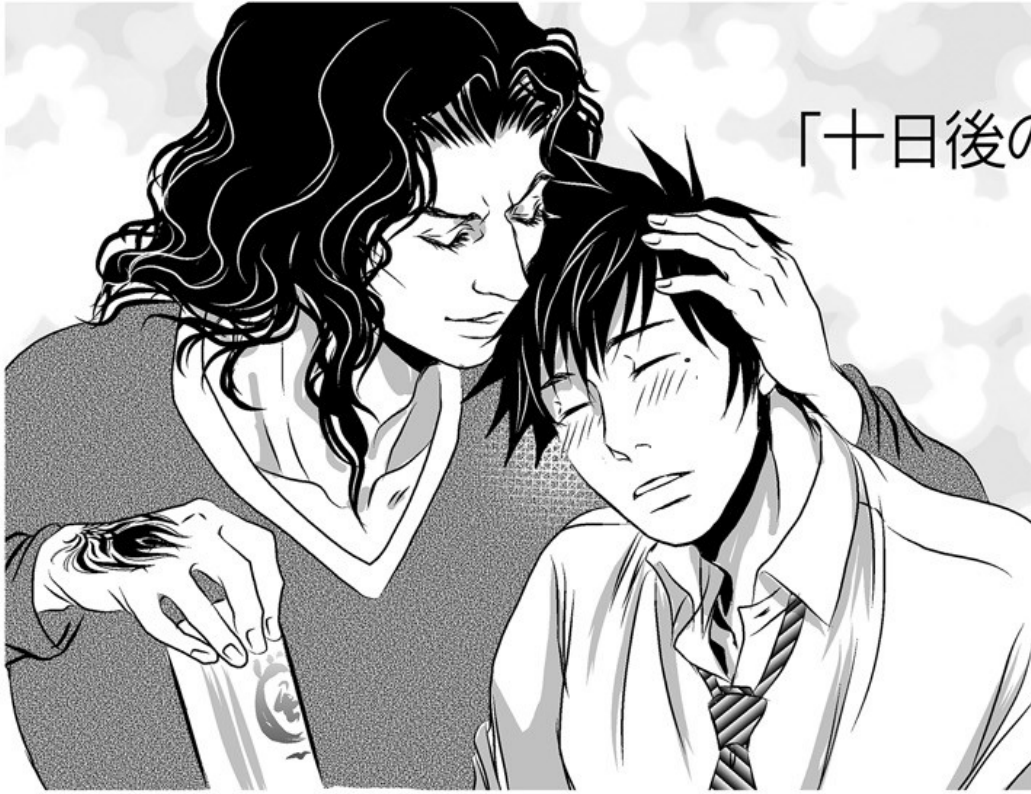
すると、また「行ってきます」と言って出て行った。

俺は、もう一眠りすることにした。

若い恋人が泊まっていった翌朝は、普段よりもっと眠い。

※「ПОСТСКРИПТУМ」……ロシア語であとがき、追伸の意

【了】



「十日後の梟と獵犬」 伊祖子久美

初出：2013/11/04

もう一度恋をするとは思わなかった。
別に前の恋人に操を立てていたつもりはない。寧ろ逆だった。
鐘淵に人生の楽しみを教えた昔の男は、もてない男を連れ歩くくらいなら金魚鉢でも持って歩いた方がましだとのたまわった。
選り好みしなければ相手に不自由しないのを幸いに、我ながらよく遊んだと思う。
その場限りの情事に虚しさを感じるほど情緒的な人間ではないつもりだった。
どうせそのうち齢を取って、容貌が衰え、どれほど甘く誘っても誰にも相手にされなくなり、いつか独りで野垂れ死ぬ。
その日まで遊んで何が悪い？
心の命じるままに振る舞うことは罪悪ではないと自分に説いたあの男も本望だろう。
そう思っていたのに、どう考えても遊び相手には不向きな男に出逢ってしまった。

来栖の容姿が悪い訳ではない。本人は余り自覚がないらしく着るものにも持ちものにも気遣っていないのが一目で解るが、ありふれたものを無造作に着ているからこそ、身長や、均整の取れた体型が引き立っている。
そういえば、泉は初対面るとき「美味しそうな身体」と言っていた。
骨格と筋肉の陰影がくっきりとした熱い身体。味わってみれば確かにその通りだった。
見た目は全く問題ない。問題は中身。それに加えて職業だろう。
おぞましいことに警察官だ。
鐘淵は、大抵の国で警察とは相性が悪い。

日本の警察組織は世界に類を見ないほど高潔だ。道を歩いているだけで止められて賄賂を要求されることはないが、彫師という職業柄、関わると碌なことがなかった。

鐘淵自身には一切前科はないし、税金も納めているというのに、顧客に暴力団関係者がいる上に、度々ロシア・東欧諸国に出掛けているために善良な市民として扱われたことがない。

制服警官だった来栖との出逢いも、それはもう最悪だった。

あれでどうして自分が捜査に協力する気になったのか、そして協力した結果も予想通り碌でもなかったというのに、どうして来栖とつきあうことになり、そして、今、冷蔵庫にビールを冷やして待っているのか。

何がどうしてだか知らないが、俺はあいつに惚れられて絆されて、つきあうことになってんだよな？　なのに、なんで俺が待ち侘びてる？

理不尽だ。

警察官でいる限り鐘淵にタトゥーを彫って貰う訳にはいかない、と本当に辛そうに言ったので、来栖の胸に染料(ヘナ)で花模様を描いた。十日もすれば消えてしまうものだから、また来いと言った。

十日はもつからと言って、本当に十日間ほったらかされるとは思わなかった。

丁度十日目の今日、宵っ張りの鐘淵が不承不承ベッドから身体を起こす正午過ぎに電話があった。

「……よお」

『すみません、お昼時に。今大丈夫ですか？』

来栖は、寝起きの声を不機嫌と勘違いしたらしい。世間では、昼飯を食う時間だったが、鐘淵はその日の最初の食事をするのももっと遅い。

『都合が悪くなければ、今晚伺ってもいいですか？』

十日と言ったらきっかり十日経つまで電話もかけてこない上に、なんだこの他人行儀な口の利き方は。

「いつでも構わない。留守でも近所のコンビニか定食屋にいるから電話くれたらすぐに戻る」

そして、ひともしごろからずっと待ち侘びている。

……なんだ、これは。

チャイムが鳴り、ドアが開いた。

「こんばんは」

来栖が細く開けたドアから顔を覗かせた。ためらいがちに挨拶をしたのは此処が堅気と見做されない鐘淵の住居兼スタジオで、来栖が刑事だから人目を憚って、という訳ではない。仕事でなく、プライベートな理由で訪ねることに慣れていないせいだろう。

鐘淵は無言で立ち上がり、入り口まで行ってドアを閉めて引き寄せた。

挨拶はしても構わない。けれど、久しぶりに逢ったときにはキスした後でいい。

「……ん……」

手を触れた瞬間、唇が触れ合った瞬間、舌先で唇を開かせた瞬間、僅かに身体が強張る。この前抱いたときもそうだった。

多分、拒絶したい訳ではない。今こうして長いキスをしている間も本当に一瞬だけ戸惑った後は、服の上からでも解るほど来栖の身体は熱くなった。そして指を絡め、唇を開き年相応に上手に応える。

歳……そういえば、こいつは幾つだろう？ 最初に逢ったのが五年前でそのとき既に制服警察官だった。

「来るのが遅い。前は鬱陶しいほど毎日通って来てたのに」

鬱陶しい……と、思わなくなったのは、いつ頃なのだろう？

——最初からか？

「すみません、忙しくて……本当に忙しくて」

来栖は鐘淵の肩に顎を載せるようにして寄りかかったままそう言った。耳許で言われたのでなければ聞き取れないような、ためいきのような囁き声だった。首筋に当たる頬も吐息も熱い。

忙しかったというのも嘘でないというのは察せられたが、それだけではない逡巡も混ざっている。

「それに、もしかしたら迷惑かもしれないと思っ……ん……！」

最後まで聞くのも嫌で、もう一度キスした。

俺が、この俺が、どれほど待ったと思っているんだ、こいつは。

「お前なら、いつ来ても迷惑じゃない」

「本当ですか？」

「ああ」

短い髪を撫でると、来栖は鐘淵の背中を抱き返して来た。

冷えたビールを差し出すと、来栖はまた戸惑ったような表情をした。

「どうした？」

「……飲めないんです」

そう言うと、来栖はもう酔っているのかと思うほど真っ赤になった。

「アレルギーか？ 酒飲むと蕁麻疹出す奴を知ってるが」

「いえ、そうじゃないんですけど」

「それなら、ほら」

プルタブを引き上げて缶を渡すと、来栖は缶を真上から凝と見つめた後口をつけた。初めて見るものを食べる子供のような仕様に笑ってしまいそうになる。

鐘淵はもう一本ビールを出すついでに、つまみにしようと思って買って来た唐揚げを出した。

「晩飯まだだろ？」

一息入れたら、飯でも食いに行こうと誘うつもりだったが、焦らされ過ぎて待てないかもしれない。

鐘淵はベッドの縁に座る来栖の横に掛けて肩を抱いた。来栖は、また一瞬だけ身体を強張らせ、そしてゆっくりと身体を預けて来た。

顔を覗き込むと、目許も頬も耳も紅潮していた。

こいつは、こんなんで、どんな風に女とつきあっていたんだろう？

——つい、想像しそうになってしまった。

やめよう。

「来栖？」

「……み、ま……せん、大丈夫……です」

軽い呻き声を上げた。ぐらりと来栖の頭が揺れる。

来栖は鐘淵と二人きりだと本当にすぐに真っ赤になるが、今のこの顔色は尋常ではない。

「おい？」

鐘淵は、前のめりに倒れてしまいそうになる来栖の肩を支えて、自分の肩に押しつけた。

「……大……丈夫……」

首筋まで真っ赤に染まっているせいで、白いドレスシャツが更に白く見える。

鐘淵は、自分のビールを床に置き、来栖が両手で握っている缶を抜き取った。中身は半分ほど残っていて、まだ十分に冷たい。

「……弱いったって、お前、限度があるだろ。その身体で」

鐘淵よりは少し小柄だが、多分、身長は一八〇を少し超える。筋肉もしっかりついていて、鐘淵をナイフで襲った殺人犯を素手で抑え込んだ。多分、数十秒で。

「……お前、これはないだろ？ いや俺が悪いんだろうけど」

来栖は確かに飲めないと断った。それを更に奨めたのは鐘淵だ。

少し飲めば、触れるときの一瞬の躊躇や、緊張や、遠慮がなくなるかと思っただけのことだった。確かに、今は邪魔だと思ったそれらはない。

けれど、何もしていないうちに肩に凭れて安らかな寝息を立てられてしまった。自分が奨めたから無理をして飲んだのだと思うと怒ることも出来ない。

鐘淵は、来栖のビールに口をつけた。

こいつは、手軽に遊べる相手ではなかった。

鐘淵が触れる度に緊張するのは決して拒絶ではなく、不安と含羞だ。

それを取り除く手間を惜しもうとした罰か、これは。

鐘淵は、ビール缶から口を離し、来栖の頬にキスした。

「……大丈夫……です……」

「寄りかかってろ」

鐘淵は、来栖のネクタイの結び目に指を入れて緩めた。

忙しかったと言っていたし、ベッドに横にならせてやりたいが、少しだけこのまま凭れさせておこう。

本人は無自覚だが、無防備な来栖は色っぽい。だから今すぐにでも全部脱がせて裸にして組み敷きたい。

けれど、殆ど意識もない今この状態でそれをしようとも、よく眠っているのを揺り起こそうとも思えない。

とても不思議な気分だ。この顔は何時間見ても飽きそうにない。

——ま、いいか。

ビール一本半を空けるまで、つまみの代わりにキスしていよう。

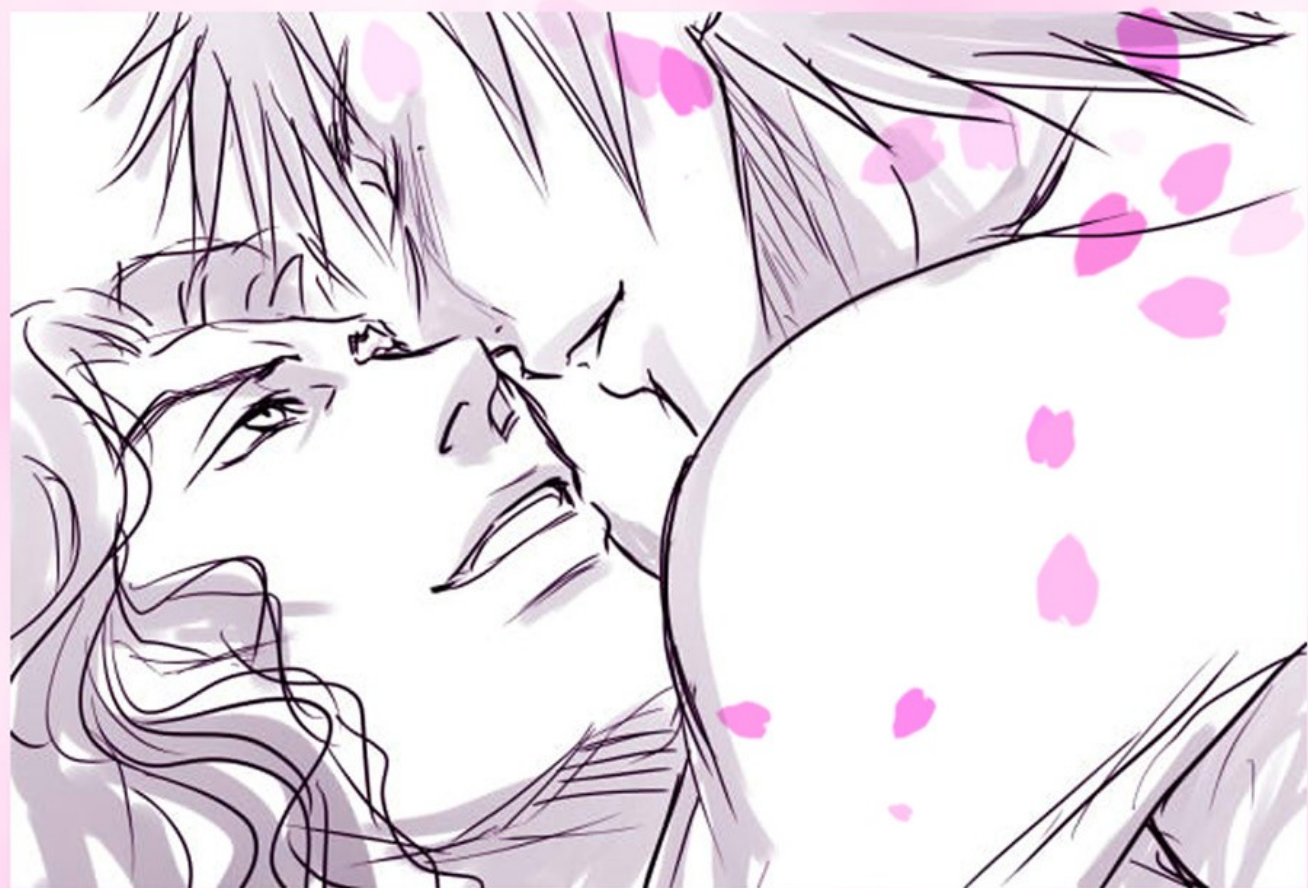
唇だけでなく、額の生え際にも、耳にも、顎にも、首筋にも。

酔いが冷めたら少し話しよう。

手間を省かなければならないような短いつきあいにする気はないのだから。

例えば、お前は幾つなんだとか、お前の好きな食べ物はとか——そんな他愛もない、しかし重要なことをまだ知らない。

【了】



君と見る 枝垂桜

「梟と獵犬」番外編

伊祖子 久美

普段は小さなスタジオで彫師をやっているが、真夏の日本は人が住める場所じゃないと思っているので稼いだ金を持って渡欧する。たまに翻訳や雑文の仕事を受けて糊口を凌ぎ、稀にデザインの仕事にありつけると少し懐に余裕が出来て、また旅に出る。

気楽な暮らしだ。やめられる気がしない。

やりたくないことは一切せず、好きなことだけして、滅多に人に頭も下げず——但し、老後どうするかとか、明日病気で倒れたらどうするかとか考える人間にはお奨めしない。幸い俺はそんなことは考えない性質だ。

好きな仕事で食えて、ひととき優しくしたりされたりするだけで深入りしない相手と寝て——それについて誰にも文句を言われぬ。

俺は十分に幸せだった。

どういう訳か、久しぶりに恋をした。

無駄に健康な身体に欲望が残っているだけで、心は疾うに枯れ果てていると思っていたから、自分に驚いた。

たとえ一緒に暮らせなくても、毎日逢える訳じゃなくても、自分だけの男がいるというのはいいものだ。

警察官ってやつは、いつ忙しくなるか解らない。そして、暇な時期なんてものは絶対になんてことくらいは解ってるつもりだ。

俺は自由業で、ある程度気儘が出来るから、急ぎの仕事がない限り来栖に合わせて休みを取ることも容易い。

恋人が忙しいなら、俺も何かで自分を忙しくしておけばいい。

だから、おはよう、おやすみのメールが定時に来るだけで三週間も放置されても、大人の余裕で堪えてやるのも吝かじゃない。

が、しかし、十年前なら迷わず他で男を調達してるとこだ。

「こんばんは」

漸く来栖が来た。

ちょっと目を眇めて見下ろすと、すまなそうな表情で見返して来る。

十歳年下の俺の恋人は、逢いたかったとか、逢えなくて不安だったとか——そういうことを、俺を見上げる目で語る。自分の方が俺をほったらかしておいて。

しかし、とても責める気にはなれずに肩に手をかけると安堵した微笑を浮かべて俺に抱きついた。

「ごめんなさい」

耳許でそう言うので、抱きしめて、こういうとき言うべきことを教えてやる。

「逢いたかった。——寂しかった」

そう言うのと、腕の中で来栖が息を呑んだのが解った。多分、俺がこういうことを言う男だと思わなかったんだろう。そして、痛いほど腕に力を込めて俺を抱き返して来た。

「——ごめんなさい」

来栖はまたそう言った。

「もういいから、やらせろ」

そう言うのと、唇に触れる耳朵が一気に熱くなった。

「ちょ……待っ……」

うるさい。

そのまま耳孔に舌を挿し込むと、戸惑ったような小さな悲鳴をあげた。

来栖がどうしてもと言うので服を脱いでくそ狭いシャワールームに入った。俺と来栖が二人で入ると、床に置いたボディークリームソープのボトルを取ることも出来ないほど狭い。

子供の頃から武道をやっていたという来栖の身体には一見硬質な筋肉がついているが、触れるとしなやかで柔らかい。そう感じるのは、若い肌が肌理細かくて滑らかなのもあるのだろう。

「綺麗——」

まさに、来栖の身体が綺麗だと思っていた瞬間だったので、自分が無意識に口に出したのかと思った。

来栖は、俺の胸の月下美人を指先で辿っている。

俺と寝たことのある相手は、殆ど例外なく、俺の全身に彫られたタトゥーについて論評するが、こいつほど賞賛する奴はいない。凝った修辞も豊かな語彙もないが、息遣いと視線だけで十分過ぎる。

ああ、もう無理だ。

こうまで狭くなきゃ、此处で始めちまいたいのをキスだけで堪えて寝室に連れて行った。

こいつが来ると連絡を寄越したから換えたシーツに二人して倒れ込む。——どうでもいいが、今、ちょっとベッドが嫌な軋み方をした。俺の身長は一九〇超、こいつも一八〇以上はあるだろう。そのうちスプリングがいかれそうな気がする。

まあ、でも、今すぐ壊れるんでなきゃ構わない。次に新しいのを買うときにはセミダブルじゃなくてダブルにしよう。

互いに指を絡めて強く握り締め合いながら長いキスをするうちに、来栖の身体から強張りが抜けて行く。

「……征尊さん……」

僅かに唇を離すと、掠れた声で俺を呼ぶ。

「ん？」

別に用があった訳じゃないのは解っていたが、首筋に唇を移しながら問うと来栖はためいきをつきながら俺の髪を指に絡め、征尊さん、とまた呼んだ。

「……あ……！」

本来、ノンケだから男に突っ込まれるなんて耐えられないことだろうに、来栖は最初るときから、戸惑い、恥じらい、怯えてさえいながら、俺を信じて、無意識にさえ抵抗しなかった。

今も残る甘い含羞が堪らない。

必死に声を殺そうとするので、歯を立てないようにしながら乳首を強く吸ってやると喉の奥で呻いた。

久しぶりだから、もっと、早く、と、泣いてせがむまで焦らしてやろうと思ったのに、俺の方が我慢出来なくなった。

硬く漲って、反り返った来栖のものを掴んだ。先走りの滴が叢にまで滲み込んでいる。

軽く、ゆっくりと扱いただけなのに、来栖は忽ち息を弾ませた。

「もう我慢できないのか？」

「……あ……！」

「久しぶりなのは確かだが——早すぎないか？」

若いから、一回射精ただけで満足しきってしまうなんてことはないのは重々承知してるが、ちょっといじめてみたくなって手を止めた。

「征尊さん……」

切ない声で来栖はまた俺の名前を呼んだ。

「自分で抜かなかったのか？」

そう訊くと来栖は顔を真っ赤にした。

「……毎日帰りが遅くて——そんなことするより眠りたかったんです」

自分でするなら数分もあれば十分だろうに、本当に忙しかったらしい。

両脚を広げさせ、一気に根元まで口に含むと、息を詰めた。

ゲイだろうがノンケだろうが、これが嫌いな男は余りいないだろう。

来栖の膝の内側の筋が強張った。本当に随分早い、本気で限界らしい。

「征尊さん……！」

「いけよ。飲んでやるから」

「……あ……！ もう……だめ……！」

酒も煙草もやらない若い身体は、シャワーで洗い流しただけで男の匂いさえ消えてしまうが、この瞬間、俺が咥えているものから進ったものは確かに俺の男の味がした。

「征尊……さん……」

来栖は俺の髪を梳き、深いためいきをついた。

よくまあ、こいつが俺なんかに惚れたもんだと思う。

刑事でいるときのこいつは、かなりきつい顔をしているが、こういう無防備なときの表情は少年めいていて、その癖とても甘い印象になる。

滲んだ汗が粒になり、瑞々しい肌が一層艶めいて色っぽい。

暫く休ませてやろうと思って枕に頭を置いて、鑑賞しようと思っていたのに来栖は起き上がり、俺に覆い被さってキスして来た。

休憩は要らないらしい。

まあ、俺も飢えてるからありがたい。

今、自分が瀉したものを飲み込んだばかりの俺の口中を丹念に舌先で愛撫し、俺のものに手を触れる。

そのまま唇を離し、俺の上半身に視線を彷徨わせて「綺麗……」と呟いた。

俺のタトゥーがいいと言った奴は多いが、此処まで好きな奴は珍しい。まるで酩酊したような目で身体のあちこちにキスしてくる。

以前、タトゥーに特別な嗜好でもあるのかと訊いたらそんなことはないと言いつつ。刑事という職業柄、犯罪者のタトゥーを頻繁に目にするが、それは単に『身体的特徴』と認識するだけで、それらに一々反応していたら仕事にならないと言った。確かにそうだろう。

来栖が、ただ単にむやみやたらにタトゥーが好きなだけの男なら俺もこいつが仕事に忙しくしてる間は自分も仕事してりゃいい、なんて鷹揚に構えてる訳には行かなくなる。

来栖の唇が、脇腹や腰骨のタトゥーを辿って腿まで来た。

好きなようにさせてやるのも限界だ。

顔を上げさせ、もう一度組み敷こうとしたが、来栖は俺の脚の間に顔を埋めた。

「……っと」

思わず声が出た。

俺のものを頼る来栖の前髪を撫で上げて「無理すんな」と言っただが、来栖は無言で舌を使い続けている。

不慣れでも、これが途轍もなく下手な男は実は余りいない。自分の身体を知っていれば、相手の気持ちいいことも解るものだが、生理的嫌悪を我慢しながらして欲しいとは思わない。

不慣れでも、これが途轍もなく下手な男は実は余りいない。自分の身体を知っていれば、相手の気持ちいいことも解るものだが、生理的嫌悪を我慢しながらして欲しいとは思わない。

上半身を起こして俺のものを咥える来栖を見下ろすと、その表情は、俺のタトゥーにキスするときと同じだった。

義務感で『お返し』をしてくれてる訳ではないらしい。

「こら。こっちは若くないんだ。ちょっと加減しろ」

三週間ぶりで俺も溜まってるし、このまま口でいかされちまったとしても回復出来ないほど衰えちゃいないが、久しぶりだから、こいつの一番色っぽい顔を見ながら、切ない声を聞き、そして、こいつの中で果てたい。

来栖はまた仰向けになって俺を見上げた。

「俺の咥えながら、こんなにしてたのか？」

さっき射精したばかりの来栖のものに触れると、もう屹立している。

汗に濡れて血色が良かった来栖の肌が更に紅潮した。

つくづく、可愛い。

俺はベッドの下を探り、小さな箱を掴んでベッドの上に置いた。男と寝るときには、男同士を受け入れてくれるラブホテルを使うことが圧倒的に多かったが、来栖とつきあうようになってから、来栖用の枕を買い、ゴムとローションはこの小箱に入れてベッドの下が定位置になった。

ボトルを傾けると、透明な液体がとろとろと糸を引くように掌に落ちて行く。来栖は息を詰めてそれを見つめている。

陰囊の裏を指で探ると、来栖の身体が強張った。

丁寧に慣らし、丹念に仕込んだはずなのに、俺を拒もうとしているかのように硬い。

忙しいと言って此处に来なかった間に、少なくとも他の男に抱かれていなかったのだけは確かだが——今すぐにでも突っ込みたいのに。

「……あ……！」

俺の肩に脚を掛けさせてそこを露にし、ゆっくりと指を沈めると、来栖が小さく叫んだ。

一番感じるところに指先を押しつけるようにしながら奥を探り、ぎりぎりまで引き抜くと、漸く受け入れ方を思い出したようで深く息を吐いた。

「此处、いいんだろ？ 逢えないときは自分の指でこうしろよ」

「……そんなっ……こと……！」

「これじゃ、初めてのときと同じじゃねえか」

「……あっ……！ ああ……！」

一本しか入らない指も、締めつけられて痛いくらいだ。けれど、その指を抜き差しすると来栖は声をあげ、涙を滲ませた。

流石に、初めてのときよりは時間はかからなかった。

勃起上がったものの先端を舌先で割るようにしながら、ゆっくりと指を動かすと、来栖は俺の名前を呼んだ。

「……あ……！ んっ……あっ……！ ん……！ んっ……！」

一旦指を抜いた瞬間、安堵したように息をついた後、甘く続きをせがむような声をあげ、それに応えて指を二本挿し込むと苦しげに呻いた。

痛いはずはない。

眉を寄せてきつく目を閉じている表情は切なげでとてもいいが、その中に来栖自身がコントロールできない嫌悪や違和感が混ざっていないかと探ってしまう。

本来、こいつは女が好きなのだ。

男は俺以外だめだというのが本当だとしても、女が欲しくなることがあるかもしれない。

そんなことを思わないほど満足させ、絞り尽くしてやりたい。

「征……尊……さ、ん……」

「いきそうなのか？」

まだ俺のものを受け入れられるほどではないのに、浅い部分の感触が変わって来ている。

舌先で前を刺激するのをやめ、ローションを足して、指の動きを速くする。

「……あ……！」

「……ほら。どうしてほしい？ このままいくか？」

とろけそうなほど緩ませてから訊いてみた。

来栖は今にも泣くんじゃないかと思うほど目を潤ませ、俺を見つめた。

我ながら意地が悪いとは思いますが、長いことほったらかされた上に、挿れられるようにするために散々手間をかけたんだ。これくらい御褒美があってもいいだろう。

「……挿……れて……ください……」

消え入りそうな声で来栖はそう言った。

ゴムをつけた先端をあてがって一気に貫くと、来栖の身体が跳ね上がった。

「ああっ……！」

鋭い眦に溜まった涙を舐め取り、ついでに泣き黒子にもキスした。この小さな黒子が、どれくらい自分の印象を強くしているか、来栖は知っているだろうか。勿論、なくてもこいつの顔立ちは十分に整っているが、これがあるために厳格で硬質で、ともすれば冷たく見えるかもしれない顔に正反対の表情を与えている。

「征尊さん……！」

腰に巻きつけられた脚のせいで動きづらい。両方の足首を持って、また俺の肩に掛けさせて抜き差しを速めると、来栖は一気に昇りつめてしまったらしく俺のものを強く締めつけ、譫言のように、いく、と何度も繰り返し叫んだ。

「俺も、もう無理そうだ」

最後の一突きの際に、来栖も射精した。

「あ！ ……あ……っ……！」

切なく哭き、痙攣に近いほど全身を強張らせたあと、来栖は一気に弛緩した。

俺も、長いためいきを吐き、身体を離そうとしたが、来栖の奥深くにある襞がまだ離れるなというかのように蠢くし、俺のもまだ萎え切っていないし——試しに小刻みに動いてみた。

「……征尊さん……？」

「そのまま、じっとしてろ」

来栖の若さに触れて、自分が酷く齢を取ってしまったように感じることも多いが、この若さに引き摺られてもいるらしい。

「嘘でしょ……！？」

「何が？」

一旦抜いてゴムを換えようと思ったが、このままもう一回出来そうだと。

「……ちょっと、待って……無理っ……！」

「無理じゃねえだろ。若い癖に」

「……待っ……！ まだっ……！ ……あ……！」

「そう簡単に壊れる訳ねえだろ、この身体は」

とっくに実証済みだ。

かなり無茶をしても、次の日には白いシャツを整然と着込んで仕事に出掛けて行きやがる。公僕の使命感がそうさせるとしても、ちょっと癪に障る。明日は休みだと言ってたから、今夜は寝かせてやらねえ。

足腰が立たなくなるまで苛んでやるつもりだったのに、起きられなかったのは俺の方だった。

来栖は九時には起きてコンビニで二人分の朝飯を買いに行った。

嫌になるほど若くて健やかだ。

「もうちょっと寝かせてくれ……」

「征尊さん、完全に夜型ですもんね」

食べ終わった来栖に、お前ももうちょっと寝ろ、と言うと、Ｔシャツとトランクスでベッドに戻って来た。

ちょっと硬いが、でかくて暖かくて、いい抱き枕だ。

昼過ぎにやっと起きると、来栖はまた「ごめんなさい」と言った。

「何が？」

「桜、散っちゃった」

なんで、それを来栖が謝るんだ？

——ああ。そういえば、三月の半ばに、花見に行こうと言ってたっけ。

それは約束というほどのものでもなかったし、俺は本気で忘れてたが、律儀な来栖は気にしていたらしい。

忙しかったのも、花が散ったのも、来栖のせいじゃないのに。

俺としては、一日ベッドで微睡んだり、戯れたりして自堕落に過ごしても良かったんだが、出掛けることにした。

東京の染井吉野は殆ど散り終わって、若葉の色が日に日に濃くなっているが、まだ咲いているところはある。

俺の車は近頃調子が怪しいので、来栖の車で高速を使って桜を追ってみた。

長野で一般道に降りて、宛もなく山道を走ると、見事な枝垂桜を見つけた。

実にいい一本桜だ。八分——いや、九分咲きってところか。

少し離れたところに車を停めて、二人で木の下に立った。

「綺麗ですね」

来栖は言った。

確かに綺麗だ。何より、有名な桜の名所じゃないので、大騒ぎする酔っ払いがいないのがいい。来栖は缶コーヒー、俺はビールのプルトップを折って垂れ下がる枝に隙間なく咲く花を眺めた。

俺は別に年中行事としての花見には興味はないから、わざわざこんなところまで来なくても構わなかったんだが——やっぱり来て良かった。桜は美しい。

「お前に似てるな」

そう言う、来栖は首を傾げた。

「え？」

「桜」

「俺が？」

「ああ」

「警視庁勤務桜田門だけに？」

来栖は笑った。

「いや。無垢な感じとか、妙に思い切りのいいところとか」

そう。桜は儚いのではなく、潔いのだ。



謝辞

今回この作品を制作するにあたり、以下の方々に
お力をお借りいたしました。
心より感謝いたします。(順不同)

三増紋右衛門さま



■ 正教における死者への祈りの言葉の監修 ■
(正教信者さまにして江戸曲独楽の曲芸師でもあり
ニコニコ動画 SAMURAI MMD
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm21979793>
企画にて様々な武術の実演をされているお方です)

■ ネームチェック ■

いけだまやさま

w e b 漫画雑誌「いけたま！」の主催さま
<http://bit.ly/1dlcniE>



ろささま

伊祖子さまのご友人



梟と猟犬

発行:2013年11月4日

著者:純友良幸
(原作 伊祖子久美)

発行:a bullet.
[http://homepage2.nifty.com/cafetap/
plastick.dog@gmail.com](http://homepage2.nifty.com/cafetap/plastick.dog@gmail.com)



伊祖子久美さまのブログ
「雑音集積所」

<http://iso5kumi.blog.fc2.com/>
cantarella17@excite.co.jp



印刷会社:株式会社ポプルス

